

## 序章

日本語は世界の言語の中でも、擬音語・擬態語などのいわゆるオノマトペを豊富に持つ言語の一つである。それらは文芸作品に限らず、日常生活の中で、特に話し言葉において頻繁に使用され、話し手の細かな心情を表したり、様々な事物の様態を生き生きと描写する際に欠かせない語群である。

では、これまでの日本語教育において、オノマトペはその使用頻度や重要性に見合うだけの十分な学習や指導がなされてきたのだろうか。例えば初級において「一本」、「一匹」などの「助数詞」が独立した項目として取り上げられることがあるのに対し、オノマトペは「犬はワンワンとなきます」など、ごく限られた形でしか提示されていない。ところが中級、上級と進むにつれ、学習者は授業で取り上げられる生教材や新聞・雑誌、テレビ番組などのメディア、および周囲の日本人の会話などの中にオノマトペが非常によく使われているということを知り、その数の多さとともに意味・用法の習得の困難さにも気付くのである。また指導する教師の側も、初級においてほとんど体系的に指導していなかったオノマトペを、中級以降どのように指導していったらいいかという問題、指導する際の適切な教材や有効な指導方法が見当たらないという現実にもぶつかることになる。

筆者は、長い間日本語教育の現場で教えてきた経験から、オノマトペを学習者に指導することの必要性、学習者がオノマトペを学ぶための教材開発の必要性を強く感じながらも、日本語教育においてこのことが正面から取り上げられていないということに疑問を抱いてきた。日本語は語彙が豊富な言語であると言われる。そしてその中でも特に豊かな表現力をもつオノマトペを学習者が使えるようになることは、積極的に支援されるべきことだろうと思う。そのためにはまず、教師がオノマトペを、豊かな表現をするための重要な語群として認識し、その特徴や一つひとつの語、特に基本的な語の意味・用法をしっかりと把握する必要がある。また、学習者にオノマトペに興味を持たせ、学習者がオノマトペについて知りたい、学びたいと思ったときに、適切な教材をリソースとして提供し、さらに教室活動の中でどうすれば効果的に提示していけるかという指導の方策を考えていかなければならないと思う。

本論文は、6つの章から構成される。第1章は、オノマトペとは何かという本研究の出発点ともなるオノマトペ定義の問題に取り組む。オノマトペの定義と分類、他の言語にお

けるオノマトペ、またオノマトペにおける音象徴、意味特徴、音韻・形態的特徴、統語的特徴、「語彙性」と「オノマトペ度」など、様々な観点から先行研究を概観し、その成果を吟味することによって、本論文における日本語オノマトペの範疇、すなわちどんな語をオノマトペと定義するのかということをはっきりさせる。第2章では、国語辞典、擬音語・擬態語辞典、日本語学習辞典などにどのようなオノマトペが見出し語として採録されているか、またそれらの辞書におけるオノマトペの意味・用法はどのように記述されているかということ調査し考察する。第3章は、日常の言語生活においてオノマトペが実際どのように使用されているか、その使用実態を知る手掛かりを得る目的で、各種言語資料と日本語の初級・中級教科書を調査・分析し報告する。第4章では、日本語オノマトペの教育に向けて、先行研究の知見もふまえて、オノマトペ指導の必要性と、オノマトペのいくつかの特徴に基づいた具体的な指導の方策についての提案を行う。続く第5章において、日本語教育の比較的早い段階からオノマトペを学習・指導することを前提とし、基本語彙に関する先行研究の成果と第3章で調査・分析した資料などを基に、日本語教育のための「基本オノマトペ」を選定し、試案として提示する。そして、最後の第6章において、第5章で選定した「基本オノマトペ」を学習・指導する際のリソースとするべく、各オノマトペの用法・文例および詳しい意味の記述と会話例の提示を行う。このリソース化によって、外国人学習者の日本語オノマトペ学習および日本語教師のオノマトペ指導を支援することを本論文の目的とする。

## 第1章 オノマトペとは何か

「オノマトペは、その音の響きから得られる意味を表すので、感覚的なことばであるが、一般語彙よりも生き生きとして臨場感のある、微妙な描写を表現するのに、特に日本語にとっては不可欠な言語要素である。このようにきわめて重要な言語要素であるにもかかわらず、従来、オノマトペは言語研究の対象として注目されることが比較的少なく、日本語だけでなく他の言語においても、もっとも遅れている研究分野の一つであると思われる。」  
(田守・ローレンス, 1999, p. 1)

オノマトペが言語研究の対象として注目されることが少なく、日本語に限らず他の言語においても最も研究が遅れていること理由として、次のようなことが言われている。まず、これまでの言語研究の模範とされた欧米の言語学では、「言語についての実際的な使用面というよりは抽象的な理論形成が主眼とされてきた。しかもそこでよくとりあげられたインド・ヨーロッパ諸語においては、オノマトペは言語体系の中心を離れた周辺的なものとして扱われることが常であった。」(笥・田守, 1993, p. i) こと。また、オノマトペが幼児の言葉や子供向けの書物などに多く見られるという事実から、オノマトペは子供っぽい幼稚な言葉であるという先入観や偏見が流布していること。さらに、「感覚的な言葉であり、その意味が直感的に理解できるために、研究する必要がないと考えられたり、逆に論理的でなく感覚的なことばであるが故に、捉えどころがなく研究しにくいと考えられていた。」(田守・ローレンス, 前出, p. 1) などである。しかし、ここ20年ほどの間にオノマトペに関する多くの研究がなされ、その成果としての論文や専門書が次々と発表され、オノマトペ研究にもようやく光があてられてきた感がある。またオノマトペが感覚的なことばであることに注目して、認知言語学の分野からオノマトペに焦点をあてようとした研究も見られるようになった。

本論文はしかしながら、オノマトペそのものを研究の主目的とするものではない。「序章」で述べたように、オノマトペがこれまで日本語教育においてどう位置付けられてきたか、また今後どう取り扱っていくべきなのかという、あくまで「言語教育」という立場からの研究である。したがって、オノマトペの先行研究を概観するにあたっては、「教育」という観点を基に据えた上で、オノマトペについてこれまで明らかにされてきたことの全容をできるだけ簡潔にまとめ、オノマトペとは何かということに焦点をしばっていくつもりであ

る。よって、近代語やそれ以前のオノマトペに関する通時的研究、他の言語におけるオノマトペとの比較・対照研究、また国語学の分野で多く見られる文学作品等におけるオノマトペ研究については、その対象外とする。

第1章では、オノマトペとは何か、そしてそれはどのような特徴をもった語群なのかということに焦点をあてた先行研究からの知見を紹介する。まず1. 1節では、オノマトペの定義と日本語オノマトペの分類について、また、日本語以外の言語におけるオノマトペにおけるいくつかの先行研究を見ていく。1. 2節では、オノマトペと他の語彙との最も特徴的な違いとしてあげられる、音と意味との関係性、すなわちオノマトペの音象徴についてまとめる。1. 3節では、オノマトペにはどのような意味を表す語が多いかというオノマトペの意味特徴と、オノマトペが持つ音韻形態的特徴、またその音韻形態的特徴をもって他の語からどう区別され得るのかということについて考察する。続く1. 4節では、オノマトペの文中における振る舞い、すなわち文の中で他の語とどのような関係において用いられているのかという統語論からの考察を行う。

以上、1. 1節から1. 4節までで見た先行研究の成果とそれに基づく考察をふまえ、1. 5節では、「語彙性」または「語彙化」、「オノマトペ度」、「境界オノマトペ」などの観点からオノマトペの範疇と定義について論じた論文、および辞書におけるオノマトペの認定について検討する。そして最後に、語がオノマトペであるための条件を改めて考察し、オノマトペの定義についての本論文における筆者の立場と主張を述べることとする。

## 1. 1 オノマトペとは

1. 1節では、オノマトペとは何かという問いに答える第一歩として、オノマトペの定義と分類、また他の言語におけるオノマトペに関する先行研究を概観する。始めに1. 1. 1項で、オノマトペという語の語源、またオノマトペをどう定義するのかということをも3種の先行研究から引用する。また、1. 1. 2項では、日本語オノマトペをその意味・機能から分類した先行研究を紹介する。そして、1. 1. 3項で、日本語以外のいくつかの言語において、オノマトペがどのように存在するか、またその特徴としてどのようなことが見られるかを、日本語オノマトペと対比しながら見てみる。

### 1. 1. 1 オノマトペの定義

オノマトペは、「ラテン語の *onomatopoeia*、英語の *onomatopoeia*、フランス語の *onomatopée* で、ギリシャ語を原語としている。語源は<音による命名><音それ自身が名になる>の意と言われている。」(小嶋, 1972, p.13) が、現在では一般的に擬音語または擬声語と擬態語を総称するのに用いられている。

日本語オノマトペの先駆的研究をなした小林(1933)は、「ドタバタ」「テキパキ」「ヤカマシイ」の3語を例にとり、以下のように定義している。

「第一のものは語音を以て自然音を寫さうとしたものであつて、寫される内容も寫す手段も共に音響の世界である。或人はこの種の語を反響語(エコイズム)と名付けてゐる。狭義のオノマトペとは之を差す。譯して擬聲語、私は擬音語と云ふ。第二のものは或種の態度を、自然音に相當する語音を以て類推的に、寫したものである。狭義の象徴とは之である。第三のものは或種の状態を、自然音とは何ら對應するところなき語音を以て示したもので、世に符號とか符牒とか稱するものが之である。」(小林, 1933, p.5)

また、『日本文法事典』の「擬声語・擬態語」の項には、以下のように定義されている。

「擬声語」は「擬音語」ともいい、「擬態語」は「擬容語」ともいう。両者を合わせて「象徴詞」ということがある。象徴詞はまた、「音象徴」あるいは「オノマトペ」ともいう。擬声語は、生物の声や無生物の音など、外界の音を音節の組合わせで表すものである。これは、外界の現実音の直接的な写音をいうのではなく、われわれが共通的なもの

として認識している語形として言語化したものをさす。外界の音を写した言語音と意味との間には、直接的なつながり（有縁性）があり、音声は直接に表現価値を有するものである。

一方、擬態語は、動作・容態や物事の状態・様子を音声連続を借りて象徴的に表すものである。すなわち、声や音のしないものに対して、見た感じや触った感じなどを音声連続で表現する（擬声語が聴覚に訴える刺激の言語音化であるのに対して、擬態語は聴覚以外の感覚、視覚・聴覚などの刺激を写音的に表したもので、これはある感覚領域に刺激が与えられた時に他の感覚が随伴する、「共感覚」とよばれる現象を利用したものである）。擬態語の中でも「イライラ」「ウキウキ」「クサクサ」「クヨクヨ」「ドキドキ」「ハラハラ」「ムラムラ」「ヤキモキ」「ワクワク」などは、人間の心理状態を表すものであって、金田一春彦は、この類を他と区別して「擬情語」と名付け、これを日本語の語彙の一特色と指摘する（「日本語への希望」『月刊言語』昭47・5）。（北原ほか，1981，p. 465）

佐久間（1959，p. 230）は、「言語生活の一面を構成する音声的描写」について、「“擬声語”はとにかく物音を描写するものということができるが、もとの音響の再現というようなものとは認められず、そうとしても極めて不完全なものというべきだ。」とし、「“擬声語”に対して、きわめて親近の関係を持ち、同一のカテゴリで考慮されるべき“擬態語”があることは、特にわが日本語を眼中におくとき、忘れることのできない事実だ。具体的な事例をもち出してくると、ある場合にはこの二者の区別が立てにくいこともあるのを知る。それほど両者は親密な関係をもつものなのだ。」と言っている。そして、「擬態語が一種の音声的描写を試みることは、擬声語と同様だが、その描写の目的は、音響に存せず、事態・事象に存する。」としている。

#### 1. 1. 2 日本語オノマトペの分類

さて、日本語オノマトペは、これまで複数の研究者によって様々な呼び方や分類がなされてきたが、田守（1991）は、それを以下の4つの立場に分類している。

##### (1) 湯沢(1931)・築島(1941)

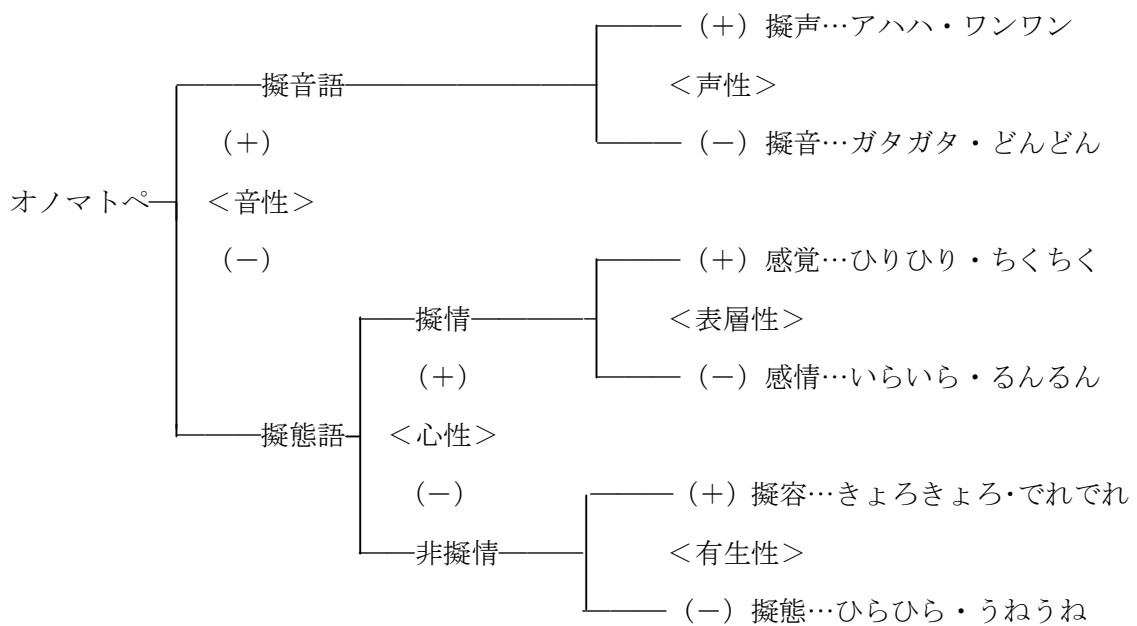
擬声語一音に関するもの（声を含む）

擬態語一音以外に関するもの

- (2) 堀井 (1986)・山口 (1986)  
 擬音語—音に関するもの (声を含む)  
 擬態語—音以外に関するもの
- (3) 小林 (1933, 1965)・鈴木 (1973, 1984)  
 擬音語—音に関するもの (声を含む)  
 擬容語—音以外に関するもの
- (4) 金田一 (1978)  
 擬音語—音に関するもの  
 擬声語—声に関するもの  
 擬態語—無生物の状態を表すもの  
 擬容語—生物の状態を表すもの  
 擬情語—人間の心理状態を表すもの

また、笈・田守 (1993) は、金田一 (1978) の分類をさらに精密化して、それぞれのオノマトペが持つ特性に注目し、【図1】のように分類している。

【図1】 「日本語オノマトペの分類」 (笈・田守 (1993) p. IVより)



このように、日本語オノマトペは、その特性から6つに分類することができるが、実際、いくつかの多義的なオノマトペは、この分類の複数の項目にまたがることもある。例えば「ごろごろ」というオノマトペは、猫が甘えて鳴く声を形容しているとすれば「擬声」、雷の鳴る音であれば「擬音」である。またお腹の具合が悪い感じを表すときには「感覚」になり、休日に何もしないでいる様子は「擬容」となり、さらに大きな石が転がる様態を表せば「擬態」である。つまり「ごろごろ」というオノマトペは、上の表のうち5種類の意味と用法を持つということになる。このことは、ある種のオノマトペは、そもそも「音」を表象するものとして発生したのち、その意味に様々な派生や転移が起こり、「音」以外のものもあたかも「音」のように象徴的に表すようになったという可能性を示唆していると思われる。

### 1. 1. 3 他の言語におけるオノマトペ

日本語は、オノマトペを多く持つ言語として知られているが、では日本語以外の言語において、オノマトペはどのような特徴を持った語群として存在しているだろうか。

佐久間（前出，p. 234）によれば、「動物の鳴き声をまねて“ワンワン”，また“ニャーニャー”のような擬声語をつくり，これをそのような声を出す動物，すなわち犬や猫の名とすること」すなわち「語源として擬声的起源の認められる」例は、日本語では小児語のほかにはあまり例がないが、ヨーロッパの言語ではいろいろ挙げられるそうである。また、日本語の場合、普通、オノマトペは副詞として動詞に伴われて現れるが、ヨーロッパ諸国語の場合には、「間投詞的なもの以外は、まず動詞として用いる傾向」がある。様々な歩き方の様子を、日本語では「歩く」という動詞一語と複数の擬態語で言い分けるのに対し、英語では複数の動詞で言い分けているというのもよく知られた例であろう。

日本語と文法構造が似ていると言われる韓国語は、野間（1998）によれば、世界の言語の中で最もオノマトペを多く持つ言語である。生越（1989）によれば、『朝鮮語擬声・擬態語分類辞典』では約 8,300 語、『朝鮮語擬声語擬態語辞典』では約 3,700 語が収録されている。韓国語にこれほど多くのオノマトペが存在するのは、「音感的特徴（音象徴）が品詞的にかなり広い範囲にわたって造語法として利用され、極度に分化された同義語が豊富に存在する」ことが理由の一つであると考えられる。また、韓国語の子音のうち閉鎖音の系列に



は、平音、濃音、激音と呼ばれる3つの系列があり、また母音には陽母音と陰母音と呼ばれるグループがある。これらの母音と子音が交替することによって、微妙なニュアンスを表現し分けることができるのである。

ただ、日本語オノマトペのうち、複数の意味・用法を持ついわゆる多義オノマトペ<sup>1</sup>については、韓国語にも同様の多義オノマトペが対応しているとは言えないようである。<sup>2</sup> 例えば、日本語で雷の音を表す「ゴロゴロ」は、韓国語では「ウルルカンカン(우루루광광)」、「荷物がごろごろ転がる」は「デグルデグル(테굴테굴)」、「休日に家でごろごろする」は、「ドゥイングルドゥィグル(뽕굴뽕굴)」と、すべて別のオノマトペとなる。また、日本語では、目の中に異物が入ったとき、「目の中がごろごろする」と言うが、韓国語では、特別なオノマトペを用いず、「目の中に何か入ったようだ」というように、その状況を動詞で直接的に描写するのである。

さて、韓国語と同様に、オノマトペが豊富な言語として知られているのは中国語である。ここで、中国語のオノマトペを、日本語オノマトペとの対照で考察した玉村(1979)の先行研究から要点をまとめる。

まず、日本語と中国語の語彙におけるオノマトペの占める割合については、以下のようになっている。

- 1) 現代日本語の語彙の中で、音象徴語<sup>3</sup>は2.5%以上になるが、現代中国語の語彙のうち、音象徴語は0.5%弱にとどまる。
- 2) 基本的な語彙の中では、中国語の音象徴語は0.833%(感叫詞を除外すると、0.233%)で、日本語のほうが多い。
- 3) 日本語の音象徴語では、擬態語が全体の73%を占めるが、中国語では、大半が擬音語である。

また、形態的には、日本語では繰り返しのXYXY型がきわ立って多い(42.86%)が、中国語では、X型、XY型、XX型が多く、この3つの型で全体の約70%を占める。また、日本語の音象徴語は、拍数・語種・組成語音などによってアクセントのタイプが異なり、

---

<sup>1</sup> 日本語の多義オノマトペの意味・用法については、第4章6節で詳しく考察する。

<sup>2</sup> 以下の記述は、国立国語研究所 e-Japan の擬音語・擬態語に関するインターネットサイト (<http://jweb.kokken.go.jp/gitaigo/index.html>) のために、姜美善氏が執筆したものを引用している。

<sup>3</sup> 玉村(1979)では、オノマトペを音象徴語と呼んでいる。

数種のアクセント型を持つが、中国語の音象徴語は、ほとんどが1声（陰平）の声調をもっているという点にも両者の差が認められるということである。

次に、中尾ほか（2003）で、インドネシア語、朝鮮語、日本語という、いずれもオノマトペが豊富な3言語におけるオノマトペの認識について、比較・分析した研究を見る。この研究では、母語話者のオノマトペに対する認識について、聴覚的イメージである「音」だけでなく、物体の変化・移動の模写的イメージである「動き」という要素も加えた観点から、アンケート調査と結果の分析を行っている。<sup>4</sup> 調査の対象としたのは、3つの言語においてほぼ同じ意味、同じ状況で使用される以下の33語<sup>5</sup>のオノマトペである。

ブルブル ニャオン ニャーニャー リーンリーン ガタンゴトン ワンワン  
ドクドク ドキドキ ドン ギー ギクッ ゴロゴロ ヒックヒック シクシク  
カンカン ズキズキ カチャ キラキラ コソコソ ブーン サクサク モグモグ  
ペラペラ ペタッ チリンチリン パリン パチパチ チラチラ ワーンワーン  
ユラユラ トントン ウルウル チクタク

この33語の各言語のオノマトペを、「音」あるいは「動き」の認識という観点から、A：「音」はあるが「動き」は認識しない、B：「音」も「動き」も認識できる、C：「音」は認識しないが「動き」は認識する、D：「音」も「動き」も認識しない、という4つのカテゴリに分類した。その結果、インドネシア語では、33語中<「音」を認識し「動き」の認識が薄い>カテゴリAに属するものが13語と最も多く、<「音」も「動き」も高く認識する>というカテゴリBのものが10個でこれに続いた。一方、朝鮮語では、カテゴリB<「音」も「動き」も高く認識する>が13語と最も多く、<「音」の認識が薄く、「動き」の認識が高い>カテゴリCが11語と続いた。日本語も朝鮮語と同様の傾向が見られ、カテゴリBが14語、カテゴリCが10語であった。このことから、インドネシア語話者は、日本語や朝鮮語話者よりも、認識が「音」によって大きく影響され、オノマトペの意味特徴としては、「動き」よりも「音」の模写性をよく捉えるという傾向がある可能性が指摘された。

<sup>4</sup> この認識アンケートでは、オノマトペの単語音をネイティブが発音し、音声分析ソフトで視覚化した結果もあわせて考察しているが、ここではその詳細は省く。

<sup>5</sup> 朝鮮語には、日本語の「(英語が)ペラペラ」「(休日に)ゴロゴロ(する)」「ニャーニャー」の3つに対応するものがないため、朝鮮語については30語を調査した。

以上、日本語同様、オノマトペを多く持つとされる韓国語、中国語、インドネシア語におけるオノマトペについて、先行研究の一部を紹介した。日本語を母語としない学習者を対照とした日本語オノマトペの教育を考えると、学習者の母語におけるオノマトペの有無とその範疇、意味・用法上の特徴などを押さえておくことは、非常に重要な課題であると思われる。今後も、様々な言語におけるオノマトペについて、知見を広げていきたいと考える。

## 1. 2 オノマトペと音象徴

オノマトペは、「音と意味の結びつきは恣意的である」という言語学の教科書の最初歩の定理にさえ、堂々と疑義を差しはさむキラキラのアウトロー」(野間, 2001, p.12)であり、ソシュールが唱えた言語における音と意味の恣意性は、唯一オノマトペにおいて例外が見られると言われている。では、オノマトペにおいていったいどこまで音と意味に結びつきが見られるのだろうか。また、どの音がどんな意味やイメージと結びつくと言えるのだろうか。1. 2節では音象徴の意味するところ、またオノマトペが象徴する意味とそれを指示する音の具体的な対応例について、言語における音と意味の有縁性を論じた先行研究で明らかにされている点をまとめてみたいと思う。

始めに1. 2. 1項で、音象徴とは何かということと、音象徴という現象をいくつかのカテゴリーに分類した先行研究を見る。次に1. 2. 2項で、日本語オノマトペについて金田一(1978)が『擬音語・擬態語辞典』において「擬音語・擬態語概説」として解説したものを紹介する。また、日本語の音象徴について詳細な分析と記述を行った Hamano (1986)の論文を、田守・ローレンス(前出)がまとめたものを1. 2. 3項で見る。1. 2. 4項では、田守(1991)が Hamano の論文に補足する形でまとめているものを紹介する。そして最後に、1. 2. 5項で、日本語と英語のオノマトペの音象徴的意味を対照的に考察し、音象徴が個々の言語を超えて起こる現象であるとする田守・ローレンス(1999)の主張を見てまとめとする。

### 1. 2. 1 音象徴とは

音象徴とは「音声はたまたまそれを含む特定の語の固有の意味とは別の象徴的な意味、すなわち一般に想定されている語と意味の慣習的な関係を超える意味を示唆することがある。」(田守・ローレンス, 前出, p.7)ことを言う。また、次のような説明もされている。「例えば日本語で「さらさら」の子音 **s** を **z** に替えて「ざらざら」とすると、摩擦に対するある種の抵抗感を感じず。また母音 **a** を **u** に交替させ「するする」、「ずるずる」とすることもできる。このように、音の交替によって何らかの意味、音相といったものの違いを組み立ててゆくシステムを音象徴もしくは語音象徴という。」(野間, 2001, p.16)。

ここで例として挙げられた以外にも、例えば「戸をとんとんたたたく」と「戸をどんどんたたたく」、「ピンポン球がころころ転がる」と「岩がごろごろ転がる」等の対応から明らかのように、一般に清音は軽さ・小ささを表し、濁音は重さ・大きさを表すというようなことは、我々も日常的に感じていることである。

Hinton *et al.* (1994) は、音象徴には、叫び声やしゃっくりのように無意識に発せられ、音と意味に完全な関係性があるものから、音と意味の関係がまったく恣意的である語まで、以下のように段階的な4つの範疇があるとしている。<sup>6</sup>

### (1) 物理的音象徴 (Corporeal sound symbolism)

話者の肉体的または感情的な内面の状態を表出するために発せられる、ある音またはイントネーションの型。せきやしゃっくりのような無意識に発せられる音から、表現性を含んだイントネーションや声色、感嘆詞などもこれに入る。このように物理的に発せられる音声は、様々な言語間に普遍性が見られるし、また人間の言語のみならず種を超えた普遍性を持っている。

### (2) 模写的音象徴 (Imitative sound symbolism)

外界の音 (例えばドアをバンと閉める音、犬の鳴き声、むちをひゅつと振る音、ノックの音など) を表すオノマトペ、また、鳥や動物の鳴き声、子供がサイレンを真似して出す声などがこれに入る。一般の語の音声規則にはあてはまらないため、書き言葉では表しにくい音であり、辞書には記述されることがないが、漫画などには頻繁に登場する。

### (3) 音感的音象徴 (Synesthetic sound symbolism)

本来音を発しない事象を音で象徴的に表すという、共感覚の領域に属する音象徴。ある母音や子音、分節が、物体のサイズや形などの視覚的、触覚的または固有感覚の特性を象徴するものがこれに入る。口蓋音や高母音は小さな物体を表し、太く低い声や母音の長音化は大きな物体を表すというような例が挙げられる。サピア以降の研究が明らかにしているように、大きさに関する音象徴は、世界中の言語にある種の傾向が見られる。例えば、ウルタンは、90%近くの言語に前舌母音が「小ささ」を表すということを見

---

<sup>6</sup> 以下は、筆者が原典を訳し、概要をまとめたものである。( ) 内は、原典における音象徴の4つの範疇の呼称である。

した。しかし、このことには例外も見られ、前述した2つのタイプに比べれば、この種の音象徴の恣意性はずっと高いと言える。

#### (4) 固定的音象徴 (Conventional sound symbolism)

ある音素や音素群が、ある意味と結びつくという類推から成り立つ音象徴。例えば 'glitter' (きらきら輝く)、'glisten' (ピカピカ光る)、'glow' (輝く)、'glimmer' (ちらちら光る) などにおける 'gl' である。言語間に多くの類似性が見られた他の3つの音象徴と異なり、このタイプの音象徴は、それぞれの言語に特有のものとなる。そして、言語における恣意性の度合いで言えば、最も恣意性の高い音象徴である。しかし、ここで大切なのは、話し手の内面においては、音と意味が絶えず自動的にリンクしているということである。このことから、この固定的音象徴は、商品のネーミングに非常によく利用されるのである。

日本語においては、牧野 (1999) が「音と意味の有縁性」について、擬音語・擬態語の範疇を超えて文法形式にも口蓋音と鼻音の意味対立が使われているという主張をしている。また、黒川 (2004) は、音の潜在意識効果、すなわち「サブリミナル効果」について研究し、「物体の出す音と、その音から私たちの脳がイメージする素材感やかたちとの間には密接な関係がある。そしてそのイメージは、脳の個体差とはほとんど関係がない、普遍的なものなのである。」(黒川, 前出, pp. 44-45) と言っている。そして、日本語の音の一つ一つのクオリア<sup>7</sup>を、擬音語・擬態語を鍵として解明しているが、ここではその詳細には触れない。

次項以下で、日本語オノマトペにおける音象徴に関するいくつかの先行研究を見ていく。

#### 1. 2. 2 日本語オノマトペに関する金田一 (1978) の解説

金田一 (1978) は、『擬音語・擬態語辞典』(1978) の巻頭で、擬音語・擬態語の特色や由来、形態、分布、文法等の項目を立てて解説を載せている。その中の一つ、「擬音語・擬態語の音と意味との関連」という項目において、金田一は、「擬音語の方は、なるべく実際

---

<sup>7</sup> ことばの音から潜在脳に浮かぶイメージ、すなわちサブリミナル・インプレッションのことを、認知科学では「クオリア」と呼んでいる。

の音に似たような音を選んでいるから、特に言うことはない。注意すべきは、擬態語の方である」として、擬態語における音と意味との関連に着目している。以下にその解説から要点をまとめる。

#### <母音>

\* **a i u e o**のうち**e**の音が著しく少ない

⇒**e**の音の発達が遅れたという国語史の問題と関係があるかもしれない

(例)「カラカラ」「キリキリ」「クルクル」「コロコロ」があるが「ケレケレ」はない

\* **e**のつく擬態語⇒多くはあまり品のいい形容とは言いがたいもの

(例)「ゲンナリ」「ゲッソリ」「ケラケラ」「セカセカ」「ペッター」「ヘラヘラ」「ペロペロ」  
など

(例外)「メキメキ」・・・現在、上達の意を表す意味に用いられるが、もとは、「メキメキ  
キ秃げてきた」のように使うのが、本筋だったもの

\* **i**の音⇒小さく、運動が速く、**a o**の音はこれに対立する傾向がある

(例)「コロコロ」と「キリキリ」の対照にその違いが見られる

#### <子音>

\* **g, z, d, b**のような濁音⇒鈍いもの、重いもの、大きいもの、汚いものを表す

\* 清音⇒鋭いもの、軽いもの、小さいもの、美しいものを表す

(例)「ゴロゴロ」と「コロコロ」、「ギラギラ」と「キラキラ」、「ザラザラ」と「サラサラ」  
など

\* **h, p**⇒**b**に対立する。

**h**・・・より文章語的で品がいい

**p**・・・俗語的で品が落ちる

(例)「はらはら」と「ばらばら」、「ひらひら」と「ぴらぴら」、「ほろほろ」と「ぼろぼろ」  
など

\* 拗音⇒直音に対して俗語的で品が欠ける

(例)「サラサラ」と「チャラチャラ」「シャラシャラ」「ザラザラ」と「ジャラジャラ」

\* **k, t**⇒堅いこと

\* **s**⇒摩擦感のあること

- \* **r** ⇒粘って滑らかなこと
- \* **h, p** ⇒抵抗感がないこと
- \* **m** ⇒柔らかいこと
- \* **r** ⇒流動を表す。同時に他の形態素と組み合わせられて、種々の状態を表し、擬音語・擬態語では重要な役を帯びる

<形の対立と意味>

反転を表す「ころ」

- 「ころっ」・・・・・・転がりかけること
- 「ころん」・・・・・・弾んで転がる
- 「ころり」・・・・・・転がって止まる
- 「ころころ」・・・・・・連続して転がる
- 「ころんころん」・・弾みをもって勢いよく転がる
- 「ころりころり」・・転がってはとまり、転がっては止まる
- 「ころりんこ」・・・・一度は転がりはしたが、最後に安定して止まって、二度と転がりそうもない

### 1. 2. 3 日本語オノマトペの音象徴に関する Hamano (1986) の研究

Hamano (1986) は、特定の音ないし音の組み合わせがオノマトペ語彙に関する限り、特定可能な音象徴的意味を持っており、日本語の音象徴が体系的であること、それゆえに日本語の2モーラのオノマトペの基本的な音象徴的意味はその音の構成要素から予測できると主張している。そして、日本語オノマトペに用いられている各種の子音と意味について、一音節の語基を持つオノマトペ、および二音節の語基を持つものを対象に詳細な分析を行っている。ただ田守・ローレンス (1999) は、Hamano の分析はあまりに詳細すぎるため、複雑で一般性に欠けるきらいがあるとしている。ここでは田守らが比較的一般性があると思われるとしたもののうち、主に一音節の語基を持つオノマトペについてまとめたものを紹介する。まず母音についての考察を見てみることにする。

/i/ 線ないし一直線に延びたもの、また音の場合には甲高い音を表す

例：「布をぴんと張る」「ギターのコをぴんと弾く」「布をぴっと裂く」「ぴっと笛を吹く」



「ぴかぴか」「きらきら」「ちかちか」・・・光の光線と関係するので線と対応

/a/ 平べったさ、大きな表面に影響を与える出来事、関わっているものの全面的関与、広がり、華やかな、派手な、あるいは目立った出来事といった多様な意味と関連している  
例：「ばん」「ぱかつ」「ぱたぱた」「ぱりぱり」<sup>8</sup>

/o/ 丸いもの、小さい出来事あるいは小さい部分にしか影響を与えない出来事、目立たないもしくは控えめな出来事と関連している  
例：「ぼたぼた」「ぼりぼり」「ぼん」「ぼっ」<sup>9</sup>

/u/ 口や鼻のような、小さい丸い穴と関係のある出来事や突出と関連している  
例：「ぶん」「ぶっ」「つーん」「ぷりぷり」「ふーっ」ひゅう」「ちゅっ」「しゅっ」「ぐっ」「ふん」「ふんぶん」「しゅん」  
音の場合には柔らかくて控えめな音を表す  
例：「くんくん」「くうくう」

/e/ 動作の不適切さないし下品さを表す  
例：「けけっ」「げえげえ」「でん」「ぺこぺこ」「ぺろぺろ」「ぺらぺら」「ぺたぺた」「ぺとぺと」「てかてか」「けらけら」<sup>10</sup>

次に子音であるが、閉鎖音 [p] [b] [t] [d] [k] [g] について以下のような考察がなされている。

/p, b/ 物体に打ち当たったり、破裂したりするような、急で爆発的な動作や出来事、ないしはこのような出来事的前提条件である「ぴんと張った状態」や突然性や力強さを表

---

<sup>8</sup> このほかに「ばあっ」(例：「せっかくのお祝いだからばあっとな派手にやりましょう」、「ばっ」(例：「彼女の着ているワンピースは人目をぱっとひく鮮やかな緑色だった」)などもこの例であろう。

<sup>9</sup> ほかの例として、「この病気にかかるると手の平にぽつぽつと紅い湿疹ができる」「女の子は部屋の隅にちょこんと座っていた」等も該当すると思われる。

<sup>10</sup> ほかに「せかせか」「でろでろ」「べろべろ」「げらげら」「へなへな」「へらへら」「へろへろ」「べろべろ」「めろめろ」「めらめら」「めりめり」等もこの意味特徴を持つと言えるように思う。

す。特に/p/は活発さや活動的な動作と関連する。

例：「びん」「びーん」「ばんばん」「ぱっ」「ぼん」「ぼんぼん」「ぼっ」「ぶん」「ぶっ」「ばっ」「ばあん」「ぼーっ」

/t, d/ 打撃と関連する。

例：「とん」「とんとん」「どん」「どんどん」

ここで、/p//b/も/t//d/も打撃と関係するが、前者ではこのような動作が関わっているものが「強く引っ張られた表面」であるのに対し、後者では典型的に「木材・床・地面」であるとする Hamano の主張に対し、田守らは若干の修正を加えている。すなわち一般的には Hamano の言うとおりの「ドアをばんばん蹴る」「両手で机をばんと叩く」等に見られように、/b/がドアや机等の木材にも用いられるし、「太鼓をとんとん/どんどん叩く」のように、/t//d/を「強く引っ張られたもの」にも使うというのである。さらに Hamano は/p/と/t/の違いを、叩くときの強さの程度にあるとしている。引き延ばすことのできる表面が強く叩かれるときは、「ぼんぼん太鼓を叩く」「肩をぼんと叩く」のように/p/が用いられ、同じ表面が軽く叩かれるときには、「とんとん太鼓を叩く」や「肩をとんと叩く」のように/t/が用いられるとしている。

/k, g/ 金属のような硬い表面との接触を表す。さらに母音/i/と共に甲高い音を表す。

例：きいきい

母音/o//u/と共に深くぼみや穴、ないしは軟口蓋咽頭音を表す。

例：くうくう、こんこん、ごおっ

次は摩擦音である。

/s, z/ 滑らかさ、障害の欠如、動作が急でないことを表す。2モーラのオノマトペの場合には、軽い接触、摩擦、小粒の動き、表面の張りが無い、流動する液体、障害の不在、ゆったりした動き、静けさ・穏やかさ、壮快さ、さらに人の性格に関して、こざれいさ、スマートさ、冷静さを表す。

ここで田守らは、この2つの音を上に挙げたように非常に広範囲の意味に対応させるの

は、音象徴に関する一般化という点からみていささか無理が生じるのではないかと指摘している。そして田守らによれば、これは/s/の音が二重の役割を持つと考えることで説明できる。つまり、滑らかさ・静けさ・柔らかさ等との対応は/s/のもつ連続音声(continuant)という性質によって裏付けられ、より大きな摩擦音は/s/のもつ粗擦性(stridency)によるものだと言えるのである。そして/s/の場合、「滑らかさ」という特徴がもっとも一般的に現れていて、その意味要素は/s a/および/s u/で始まる語に特に顕著に見られるとしている。

例1 : /s a/で始まるもの

「さっ」「さあっ」「さばさば」「さくっ」「さくり」「さっくり」「さくりさくり」「さくさく」  
「さっぱり」「さらっ」「さらり」「さらさら」「さっさ」「さわさわ」「さやさや」

例外として「さめざめ」

例2 : /s u/で始まるもの

「すっ」「すべすべ」「すいすい」「すかっ」「すっかり」「すっきり」「すくっ」「すくすく」  
「すんなり」「すぱっ」「すぱり」「すっぱり」「すばすば」「すぽっ」「すぼり」「するする」  
「すたすた」「すてん」「すってん」「すってんころり」「すってんてん」「すとん」「すう」  
「すうすう」「すやすや」

明らかな例外「すっちゃかめっちゃか」「すかすか」「すれすれ」

恐らく例外と思われるもの「すごすご」「すっからかん」「すたこら」

例3 : /s e/で始まるもの

3つしかないがそのうち「せっせ」が該当。「せかせか」は中間的なケース、「せっかち」にはこの意味要素が欠如。

例4 : /s o/

「そよそよ」は滑らかさを示唆。「そっくり」「そわそわ」はこの意味要素とはまったく無関係で、「そっ」「そうっ」「そろっ」「そろり」「そろそろ」「そろりそろり」「そそくさ」「そよ」については、問題の意味要素との関連は疑問である。

/h/ 語頭の/h/が息ないし息の吐き出しを表す。

例：「ふっ」「ふうふう」「ひくっ」「はあはあ」「ほっ」「ほほほ」

2モーラを語基にもつオノマトペでは不確定、頼りなさ、弱さ、繊細な優雅さを表す。

例：「ひらひら」「はらはら」

/m/ 語頭の/m/は、はっきりしない状態という意味を象徴する。

例：「まごまご」「もたもた」「もやもや」「もくもく」

二次的に、落ち着きの無さないし理性の無さを表す。

例：「むらむら」「むずむず」「むかむか」

1 モーラを基本形に持つオノマトペの場合、抑制や不明瞭さを表す。

例：「むっ」「むんむん」

/w/ 1 モーラを基本形に持つオノマトペでは、語頭の/w/は動物や人間の発する音を表す。

例：「わんわん」「わあわあ」「うえーん」（筆者注：ローマ字表記では「we en」となる）

「わいわい」<sup>11</sup>

/N/ 共鳴を表す。

例：「がたん」「ごとん」「どぼん」「ばたん」「どたん」「どすん」「がつん」「ぼとん」

柔軟性、弾力性との対応。

例：「涙の粒がぼたと膝の上に落ちました」

さてここで、Hamano の考察に対して若干の疑問点をあげておきたい。まず、/p/と/t/の対立についてであるが、田守らも指摘しているように、/p/と/t/が叩く強さの程度に関して明らかに相違を呈しているとは思えない。例えば太鼓を「ぼんぼん」と叩くと「とんとん」と叩くの違いを問われたら、それは叩く強さというより太鼓の種類や音色の違いと考えるほうが一般的ではないだろうか。それから摩擦音/s/のところで、/s e/で始まるもののうち「せかせか」「せっかち」がそれぞれ中間的なケース、意味要素が欠如したものとされている点だが、/s u/で始まるものと同様、これらの語にも「滑らかさ」よりは「速さ」という意味要素が含まれているように思う。また/s o/に関して言えば、/s u/や/s e/と対照的に「ゆったりした動き」という意味を含んでいると考えられる。つまり、/s/の音を含む/s a//s u//s e//s o/すべてに共通の意味要素を求めようとする

<sup>11</sup> 「わっ」「わあーっ」「わーい」「わおー」等もこの例にあてはまるだろう。

にそもそも無理があるわけで、それぞれに特徴的な音象徴的な意味を考えたほうがいいように思われる。

#### 1. 2. 4 日本語オノマトペの音象徴に関する田守(1991)の考察

田守は、日本語の5つの母音 [i] [u] [e] [o] [a] のすべてがオノマトペに活用されているが、この中で [a] と [o] が比較的具体的な意味傾向を表すとして以下のような考察をしている。

まず、[a] と [o] の違いだけによって区別され、類似する意味を持つ最小対立語として以下の例が挙げられる。<sup>12</sup>

1. ぱりぱり／ぼりぼり 煎餅を食べる。
2. がーん／ごーん と鐘が鳴る。
3. ばーん／ぼーん と何かが発火した。
4. がつん／ごつん と頭を柱にぶつけた。

これらのペアはよく似た意味を表すが、両者には微妙な相違がある。すなわち、[a] を含むオノマトペが音の拡がりを表すのに対し、[o] を含むものは、内にこもった音を表すように感じる。また前者は澄み切った明瞭な音を、後者は「もごもご」や「もそもそ」の例からわかるように、鈍い不明瞭な音を表す。田守は、この違いは両者の音声的特徴と関連していると思われるとしている。つまり [a] は低・中舌・非円唇母音であるが、[o] は中・後方舌・円唇母音であり、前者は後者よりも大きな口を開け、口の中央部から前方に向けて発音するために音の拡がりを感じ、後者は前者ほど口を開けないで口の後方部で唇を丸めて発音するので、口の中で共鳴してこもった音になるということである。

このほかの例としては、「ばらばら豆を撒く」と「ぼろぼろ豆をこぼす」において「ばらばら」と「ぼろぼろ」は言い換えることができないことから、「ばらばら」が「拡がり」を表すのに対し、「ぼろぼろ」は表さないとしている。同様に、「ぼたっ」「ぼとっ」を比べると、どちらも滴が何かの表面に落ちる様子をあらわすが、前者では滴が堅いところに落ちて撥ね散るイメージが、後者では柔らかいところに落ちて吸収されるというイメージが得られると言っている。また「がさがさ捜す」と「ごそごそ捜す」では、「がさがさ」が遠慮

---

<sup>12</sup> ここでの用例はすべて田守(1991)から引用しているが、表記を他の箇所に合わせて変更したところと、用例の一部を抜粋、または書き換えたところがある。

せずに捜しているようすが、「ごそごそ」はひそかに捜しているようすが表されているという例も挙げられている。さらに「ぱっと／ぽっと顔が赤くなる」では、「ぱっと」は顔の全体が赤くなるのに対し、「ぽっと」は顔の一部が赤くなるを表す。つまり、[a]は「拡がり」「活発」「積極」「全体」という概念を、[o]は「消極」「部分」という概念を表すと言える結論づけている。

田守の論文の中からも一つ、長母音に関する考察を見てみる。まず、長母音は現実の長い音を表すのに用いられる。この例として「マッチの燃えかすが水に落ちてジュッと音を立てる」と「濡れたところに熱いアイロンをのせると、ジュウと音がする」というのが挙げられている。「ぴっと、口ぶえをふいた」「ピーッと、口ぶえをふいた」も同様に、前者が短い音を、後者が長い音を表している。Hamano（前出）は、長母音は「時間的な長さ」に加えて「空間的な長さ」、さらには「動作がより積極的に行なわれること」を表すと指摘しているようである。例えば、「ぴっと布を裂いた」「ピーっと布を裂いた」が「空間的な長さ」の違いを表し、「ぴんと引っ張る」と「ぴーんと引っ張る」、「魚の匂いがぷんとした」「魚の匂いがぷーんとした」においては、後者が動作がより積極的に行なわれることを示すとしている。

しかし田守はこの指摘に対し、魚の匂いの例においては「時間的な長さ」「空間的な長さ」「積極的な動作」ではなく、匂いの「強さの程度」が関わっていると考えられるとしている。つまり、「積極的な動作」を「積極性に関する動作の程度」と解釈すれば、「ぴーん」が「ぴん」より「積極性に関する動作の程度」が大きいと言えるのである。すなわち長母音は、オノマトペが関わっているものが動作であれ事柄であれ、その程度がより大きいということを表すということになる。

#### 1. 2. 5 日本語と英語のオノマトペに共通して見られる音象徴

田守・ローレンス（前出）は意味的側面から日英語オノマトペを比較・検討しているが、両言語においてオノマトペ語彙そのものの意味に関して詳しい研究がほとんどなされていないため一般的な議論しかできないと前置きした上で、両言語におけるいくつかの音象徴の意味の例を挙げている。なおここではそれらの具体例として、(4) 急な終わり方の項目を除いては日本語の例のみを引用して紹介する。

### (1) 唇音と肥満

まず両言語に共通している音象徴の比較的明らかな例としては、唇音と「肥満」という意味要素の対応を挙げている。「肥満」と関連する意味を持つ日本語オノマトペは以下の通り多数あり、そのほとんどすべての語に唇音（唇閉鎖子音と円唇母音）が含まれていることがわかる。

例：「ぼてっ」「ぼてぼて」「ぼってり」「ぶくぶく」「ぶよぶよ」「だぶっ」「だぶだぶ」「でぶっ」「でぶでぶ」「でっぷり」「ふくふく」「ふっくり」「ふっくら」「ころころ」「まるまる」「むちむち」「むっちり」「むくむく」「ぼちゃっ」「ぼちゃぼちゃ」「ぼっちゃり」「ぼてっ」「ぼてぼて」「ぼってり」「ぷくっ」「ぷくん」「ぷくぷく」「ぷりんぷりん」「ぷるんぷるん」「ぷりぷり」「ずんぐり」「ずんぐりむっくり」

### (2) 水しぶき

日本語に水しぶきの音を表す語が非常にたくさんあるが、それらはすべてよく似た形態をしていて、両唇閉鎖音と粗擦音の両方を含んでいる。

例：「ばちゃっ」「ばちゃばちゃ」「ばちゃん」「ばちゃり」「ぼしゃっ」「ぼしゃばしゃ」「ばしゃんばしゃん」「ばしゃり」「びちゃっ」「びちゃびちゃ」「ぼちゃっ」「ぼちゃん」「ぼちゃり」「ぼちゃぼちゃ」「ぼしゃぼしゃ」「ちゃぶちゃぶ」「ちゃぼちゃぼ」「ちゃぼん」「じゃぼじゃぼ」「じゃぼん」「じゃぼんじゃぼん」「じゃぼーん」「じゃぶじゃぶ」「ばちゃっ」「ばちゃん」「ばちゃばちゃ」「ばちゃり」「ぼしゃっ」「ぼしゃん」「ぼしゃばしゃ」「ばしゃり」「ぼちゃっ」「ぼちゃん」「ぼちゃぼちゃ」「ぼちゃり」「ぼしゃっ」「しゃぶしゃぶ」「ざぶっ」「ざぶん」「ざぶんざぶん」「ざぶり」「ざぶりざぶり」「ざぶーん」「ざぶざぶ」「ざんぶり」

またこれら以外にも、唇音ないし粗擦音のいずれか一方を含むオノマトペの例が以下の通り挙げられている。

例：「だぼだぼ」「だぶだぶ」「どぼどぼ」「どぼん」「どぼーん」「どぶん」「どぶーん」「がぼっ」「ざあざあ」等

### (3) 乾燥したものが触れ合う音

日本語には乾燥したものが触れ合う音を表す語がたくさんあり、これらの語はほとんど

すべて粗擦音を含んでいる。

例：「ばさっ」「ばさばさ」「ばさり」「どさっ」「がさっ」「がさがさ」「がさり」「がさごそ」  
「ごそっ」「ごそごそ」「ばさっ」「ばさばさ」「さらさら」「さわさわ」「さやさや」「しゃりしゃり」「ざあざあ」「ざわざわ」「ざざっ」

同様に、大きい／強い摩擦音を表す語も粗擦音を含んでいる。

例：「じゃあっ」「じゃあじゃあ」「じいっ」「じいじい」「じりじり」「じゅっ」「じゅうっ」「じゅうじゅう」「ぶすぶす」「ぶすっ」「ぶす」「ぱちり」「しっ」「しいしい」「しっしっ」「しゅっ」「しゅんしゅん」「しゅるしゅる」「しゅっしゅっ」「しゅうっ」「すうっ」「すうすう」

#### (4) 急な終わり方

音や動作の急な終わり方は、英語では語末の無声閉鎖音によって表されることがよくある。日本語では口腔閉鎖音は語末には起こらないが、同様の効果を達成するために無声声門閉鎖音（促音）が広く用いられる。以下は対応する英語と日本語のペアの例である。

例：beep—「びっ」 bump—「こっつ」 chirp—「ちっ」 chomp—「かりっ」 chop—「ぶっつ」「さくっ」「すかっ」「すばっ」「ざくっ」 clack—「かっかっ」「ぱちっ」「ぼこっ」 clink—「かちやっ」 clout—「ぼかっ」 cluck—「こっこっ」「くっくっ」 curt—「ぶすっ」 cut—「ばさっ」「ぐさっ」「かっ」「さくっ」「すかっ」「すばっ」「ざくっ」 drip—「ぼたっ」「ぼとっ」「だらっ」「ぼたっ」「ぼとっ」「たらっ」「とろっ」 flick—「ばちっ」「びゅっ」「ひゅっひゅっ」 glint—「ぎらっ」「きらっ」 halt—「ぎくっ」 hit—「かっ」「ずしっ」 lick—「べろっ」「べろっ」 lop—「ずばっ」 plop—「ごぼっ」「ぼちやっ」 pop—「ぱちっ」「ぽっ」「ざあっ」 prick—「ちくっ」 quit—「びくっ」 rap—「こっつ」 shoot—「ぼっぼっ」 shut—「ぱたっ」 slap—「ばしっ」「びしゃっ」「びしっ」「ばしゃっ」 slip—「こそっ」「ぬるっ」「ぼろっ」「すっ」「するっ」「すうっ」 slurp—「ちゅっ」「つるっ」 snap—「びしっ」「ぼきっ」「ぶっつ」「がちやっ」「ぱちっ」「ばきっ」「びしっ」 spit—「ぺっ」「ぺっぺっ」「ぷっ」 splat—「ばしっ」「べとっ」「ぼたっ」「ぼとっ」「ぐちやっ」「ぼたっ」 split—「ばきっ」「ばしっ」「びしっ」「がりっ」「かりっ」「びしっ」 spurt—「びゅっ」「しゅっしゅっ」「しゅうっ」 stop—「ぼたっ」「ぱたっ」「びたっ」 strike—「ばちっ」「びしゃっ」「ぼかっ」「ぼたっ」「ぼとっ」「どさっ」「どし



っ」 swipe—「ぱしっ」 tap—「こっつ」 whip—「ぴしっ」

田守らはこれら一連の対応から英語と日本語がある程度同じ音象徴的な対応を利用して  
いることを示唆しているとし、このような対応が個別言語に特有のものではなく、個々の  
言語を超えて起こる仕組みによるものであることを示唆すると言っている。

以上見てきた通り、オノマトペにおいて、ある「音」がある「意味」を示唆することが  
ある、すなわち「音象徴」という事態が存在することは、疑いようのない事実である。し  
かし、その象徴性のあり方がすべての言語に共通するものとして認められているわけでは  
ない。この点に関して、泉（1976, p. 150）は、オノマトペが、「外界の音や有様の単なる  
写しではなく、意味の支えを持った、社会的な言語体系の一部をなすものである以上、ご  
く一般的な単語と同じく、これもまた森羅万象の切りとり方の一形式であることには変わ  
りがない。現実界をどのようにとらえるかが各言語の意味のポイントになっているとすれ  
ば、オノマトペにも同じことが言えるのであり、言語によって、音声の面でも、意味でも  
かなりの相違が出てくるのは当然である。」と述べている。

一方で、例えば「犬」を表す単語と犬の鳴き声とを様々な言語同士で比較してみると、  
どうだろうか。日本語は<犬—ワンワン>だが、以下朝鮮語<ケ—モンモン>、中国語  
<狗（コウ）—汪汪（ワンワン）>、モンゴル語<ノホ—ガンガン>、トルコ語<キョ  
ペッキー—ハウハウ>、英語<ドグ—バウワウ>、ドイツ語<フント—ヴァウヴァウ>、  
フランス語<シャン—ワワ>、スペイン語<ペロー—グァウグァウ>、イタリア語<カーネ  
—バウバウ>、ロシア語<サバーカー—ガフガフ>、チェコ語<ペス—ハフハフ>、そして  
国際人工語であるエスペラントでは<フンド—ボィボィ>である（野間, 前出, pp.14-15）。  
こうしてみると、野間も言っているように、「犬」を表す単語は言語ごとにまったく異なっ  
ていると言えるのに対し、鳴き声を表す「擬声語」のほうは言語間にそれなりの係わりが  
認められるのも事実ではないだろうか。

そして、オノマトペは、「共感覚を基盤にしている点で各言語に共通した面もあるという  
ことが、ふつうの全く恣意的な語と異なっている点である。」（泉, 前出, p. 150）という  
ことを考え合わせると、「音象徴」という現象を、教育の場面で過大評価することも過小評価  
することも避けるべきなのだろうと思う。オノマトペにおける音象徴性を、オノマトペの  
教育にどう生かすことができるのかは、第4章で改めて考えることにする。

### 1. 3 オノマトペの意味特徴と音韻・形態的特徴

1. 3節では、オノマトペ<sup>13</sup>を、その意味と音韻形態の面から考察した先行研究を紹介する。まず1. 3. 1項で、オノマトペをその意味特徴から考察した先行研究をしてみる。次に、オノマトペの音韻形態を、モーラ数によって大きく二つに分類、整理した研究を、1. 3. 2項で紹介する。次に1. 3. 3項で、オノマトペが音韻・形態的にどのような特徴を持っているかという点から、「オノマトペ標識」について述べた田守・ローレンス(1999)の考察をまとめる。そして1. 3. 4項で同じようにオノマトペをその形態的特徴から分類し、さらにその分類項目ごとのオノマトペの数の分布はどうなっているか、すなわちどのような形態のオノマトペが日本語に多く見られるのかということ进行调查した日向・笹目(1999)の先行研究を紹介する。

#### 1. 3. 1 意味から見たオノマトペの分布

金田一(1978)は、擬音語・擬態語の分布について、「擬音語・擬態語・擬情語は、要するに外界の音、外界の状態、あるいは内面の心理を、模写的にまた象徴的に表す言葉であるからには、いやしくも音のするものは何でも表し、状態や心理はどんなものでも表そうとしていいはずである。が、言語によって豊富に表現し分ける面と、そうでない面がある。」(金田一, 1978, p. 17)として、例えば欧米の言語と日本語では、どの生物の鳴き声を擬音語で表すかが異なっていると言っている。欧米人は牧畜民族であるため、家畜の鳴き声を詳しく聞き分けるが、日本語では家畜によっては鳴き声を表す擬音語がないこともあり、その代わりに、日本語では、鳥と昆虫の鳴き声を表す擬音語が豊富に存在するというのがその例である。

また、擬態語についていえば、日本語には触覚関係のものが著しく多いことを指摘している。中でも、「ザラザラ」「ツルツル」「ネバネバ」「ベトベト」など湿気との関係を表す語がことに多く、かつて板坂元氏が日本人を触覚民族と呼んだことがあることと関係があるだろうかと言っている。

---

<sup>13</sup> これ以降、本論文でオノマトペという時、それは、特に断りのない限り日本語オノマトペのことを指す。

泉（1976）は、オノマトペをその入力感覚から区分けして、「外からの入力」「聴覚」によるものは擬声語であり、「視覚」「味覚」「嗅覚」「触覚」そして「気分」や「心理状態」を入力とするものは擬態語（泉，1976，p. 141）であるが、これらの意味分野には偏りがあるらしいと考え、以下のように感覚別にオノマトペの分布を論じている。以下に、泉（1976）の記述を一部引用し、筆者の考察も加えた形でまとめる。

#### （イ）味覚

味覚を表す擬態語はほとんどないに等しく、「ヒリヒリ」「ピリピリ」ぐらいであり、「サッパリ」「ネツトリ」「コツテリ」なども同様に、味覚というよりは触覚と言ったほうがよいようなものである。このほかに、「スーッとする味」「すっきりした味」なども使われるが、最近では「まったりした味」という表現もよく耳にする。しかし、味覚については、形容詞でも「甘い」「からい」「すっぱい」「しぶい」「にがい」ぐらいしかなく、決して豊富とは言えないことと照応する現象であると考えられる。

#### （ロ）嗅覚

嗅覚つまり匂いを表す擬態語も、「プンブン」「プーン」「ツン」ぐらいで少ない。しかもこれらは、良い匂い、悪い匂いの区別がなく、連続的に匂うとか鋭く刺激的に匂うという意味である。これは、日本人が匂いには淡白であることからくるのかも知れない。そして、匂いを表現するには、擬態語ではなく、「花のようなよい香り」とか、「生ゴミのように臭い」という直喩の形式をとる。

#### （ハ）触覚

金田一（1978）も指摘した通り、触覚に関する擬態語は、「サラサラ」「ザラザラ」「スベスベ」「ツルツル」「ゴツゴツ」「ゴワゴワ」など豊富である。日本人は、ヨーロッパの人と比べて、人との身体的接触を好まないと言われているが、物に対しては、手触り、膚触りをうるさく言う傾向があると言える。味覚を表す擬態語が少ない中で、舌触り、歯ざわりなどを表す、「ガリガリ」「ジャリジャリ」「サクサク」「サラッとした味」「口の中でトロリと溶ける」などは、口の中の触覚というべき例である。

#### （ニ）気分・心理状態

まず、痛みを表す擬態語が、「ズキズキ」「シクシク」「キリキリ」「チクチク」など、たくさんある。また、金田一が「擬情語」と名づけたところの「ハラハラ」「ドキドキ」「クヨクヨ」など、心理状態を表すオノマトペが多いのも日本語の特徴である。

日向 (1991) では、オノマトペを意味分野別にまとめて掲載しているが、「感情・表情」という一つの章を設け、そこに 69 語のオノマトペを紹介している。

#### (ホ) 視覚

視覚からの入力をもとに人や物事の動き・状態などを表すオノマトペは、擬態語の多くの部分を占める。その中でも、日本語に目立つのは、人の様子を表すオノマトペである。「ノロノロ」「セカセカ」「スタスタ」「フラフラ」など人の歩く様子を表すもの、「モジモジ」「オロオロ」「テキパキ」など態度を表すもの、「ツンツン」「ニヤニヤ」「ヘラヘラ」「ムーッと」など表情を表すものがある。

#### (ヘ) 聴覚

いわゆる擬声語の中でも、動物の鳴き声はそれほど多くなく、鳥の鳴き声のほうが割合多くなっているが、特に偏りとして目立つのが虫の鳴き声である。擬声語としてはほかに、人の泣き声、笑い声なども数多く、体系的に存在していると言える。

### 1. 3. 2 オノマトペのモーラ数による分類

日本語オノマトペは多様な音韻形態をもつように見えるが、その基本形は1モーラまたは2モーラに集約して考えられる。以下にその基本音韻形を順にあげていくが、ここでCは子音、Vは母音、Qは促音、Nは撥音を表す。<sup>14</sup>

#### 1. 3. 2. 1 1モーラを基本形に持つもの

##### (1) CV

ふ (と) つ (と)

最も単純な1モーラだけから成るオノマトペは、現代日本語にはこの2語しかない。

---

<sup>14</sup> 以下は田守・ローレンス (1999) からの引用であるが、一部省略したり、形態ごとに付ける番号をわかりやすく通し番号に換えたり、と筆者が適宜書き換えた部分もある。

(2)

a. CVQ

ちゅっ ふっ はっ ほっ かつ きゅっ ぱっ ペっ さっ

b. CVN

ばん ぼん ちょん かん こん にゃん ぱん ぼん わん

基本形にそれぞれ促音と撥音がつくオノマトペは(1)に比べてはるかに一般的である。

(2 b) のオノマトペはほとんどの場合、自然界の物音を表す擬音語や、動物の鳴き声や人の声を表す擬声語である。

(3) CVV

がー ぐー ぎゃー ぎゅー かー きゃー きゅー さー ざー

母音が長音化された形態である。

(4)

a. CVVQ

ばーっ ふーっ かーっ ぱーっ さーっ すーっ ざーっ

b. CVVN

ばーん がーん ごーん きーん かーん きゅーん ぼーん

(4 a) の CVVQ という形態は (2 a) の CVQ という形態と関連していることが多い。また (4 b) の CVVN も同様に (2 b) の CVN という形態の異形であることが多い。なぜなら、「ひどい事を言われ、ついかーっとなってしまった」の「かーっ」は「かーとなる」という形がないのだから「かー」から派生したのではなく、「かつとなる」の「かつ」と関連していると考えられるからである。同様に、「せつなくて胸がきゅーんとなる」の「きゅーん」も「胸がきゅんとなる」の「きゅん」と関連が認められる。

(5)

a. CVQ-CVQ

くっくっ きゃっきゃっ きゅっきゅっ しゅっしゅっ

b. CVN-CVN

ぼんぼん ぼんぼん かんかん ぼんぼん ぼんぼん

c. CVV-CVV

がーがー ぎゃーぎゃー かーかー きゃーきゃー

それぞれ (2 a) (2 b) (3) の反復形である。

1. 3. 2. 2 2モーラの語基を持つもの

(6) CVCV

がば ぐい はた ひし ひた びた びよ ぷい そよ

(1) と同様、たいていが古めかしい響きを持ち、現代日本語としては稀である。

(7)

a. CVCVQ

ばたっ ばさっ ばらっ ぐさっ ころっ ぼきっ ぼとっ

b. CVCVri

ばたり ばさり ばらり ぐさり ころり ぼきり ぼとり

2モーラの語基に促音および「り」がついたもの。(7 a) (7 b) の形態はペアを成すことが多く、両者は同じ文法機能と非常によく似た意味を持つ。

(7 a) の例：突風で立て看板がばたっ倒れた。

(7 b) の例：突風で立て看板がばたり倒れた。

(8) CVCVN

ばたん ぼとん どきん ごろん こつん ぼきん ぼとん

2モーラの語基に撥音のついたもの。これらも (7 a) (7 b) と対応していることが多い。

(9)

a. CVQCV

どっか はっし すっく

b. CVNCV

むんず ざんぶ

2モーラの間には促音や撥音が挿入された形態。かなり古めかしい響きを持ち、現代日本語においては珍しい形態である。

(10)

a. CVQCVri

ばっさり ばったり がっくり ぐったり にっこり

b. CVNVCVri

ぼんやり ふんわり げんなり こんがり にんまり

2モーラの間には促音ないし撥音を含み、しかも語末に「り」を伴う形態。日本語オノマトペの典型的な形態の1つである。

(11) ばさばさ ばたばた ころころ きらきら めらめら にこにこ

日本語オノマトペの最も一般的な2モーラの反復した形態である。

(12)

a. がさごそ がたごと からころ かさこそ かたこと

b. どたばた むしゃくしゃ ぺちやくちゃ うろちよろ

(11)の反復形の変種と考えられる形態。(12)に挙げたオノマトペは、音韻形態が異なるがよく似た意味を持つ2モーラの語基が組み合わさって派生したものと考えられる。例えば「がさごそ」は「がさがさ」と「ごそごそ」の語基である「がさ」と「ごそ」が、「どたばた」では「どたどた」の「どた」と「ばたばた」の「ばた」が組み合わさって派生したものである。

(13) ちらほら ちやほや どぎまぎ のらくら てきばき

(12a)と同様の形態であるが、最初と最後の2モーラが必ずしもそれぞれの反復形の語基になっていない。つまり、「ちらちら」はあっても「ほらほら」はないし、「どぎどぎ」や「まぎまぎ」もないので、これらは、最初の2モーラのうちの第1モーラだけが変化して反復したものと考えられる。

(14) ぶつくさ ちょこまか がたびし そそくさ すたこら

まったく異なる2モーラ同士が組み合わさって出来たと考えられるオノマトペである。

(15)

a. ばたりばたり ぼとりぼとり どきりどきり ぐさりぐさり

b. ばたんばたん ぼとんぼとん どきんどきん ころんころん

(7 b)のCVCVr iという形態の反復形であるが、比較的一般性のある形態である。

(16)

a. がたんごとん からんころん かたんことん どたんばたん

b. がたりごとり かたりことり ちらりほらり のらりくらり

(12) (13) の変種と思われる形態である。

(17) ほうほけきょう こけこっこう すっからかん すってんころり とんちんかん

つんつるてん

特殊な形態と考えられる。

### 1. 3. 2. 3 考察

ところで田守らは、日本語オノマトペの典型的な形態であるとした(10) CVQCVr iの形態をもつオノマトペについて、以下のような興味深い考察を行なっている。

「(10 a) のオノマトペは多くの場合、例えば「ばっさり」「ばさっ」「ばさり」「ばさばさ」のように対応する異形を持ち、「ばさ」という語基の存在を認めることができる。しかし、「がっぷり」「きっぱり」「はっきり」「ゆっくり」のように対応する異形を持たないものも多数ある。これらには「がぷ」や「きぱ」のような語基が認められないものの、日本語話者にとってはこれらもオノマトペと感じられるのではないかと思われる。そして「はっきり」「や「ゆっくり」は同じ形態構造を持っていても「がっぷり」「きっぱり」ほどオノマトペ的であるとは感じられないようである。しかしこのように、語基の存在が認められず、同じ形態構造を持つ語でありながら、一方が他方よりオノマトペ的であると感じられるという主観的な印象だけで両者を区別するのは理に叶っていないので、ここではCVQCVr iという音韻形態を持つものは、便宜上すべてオノマトペとして考察の対象とす



る。」

さて、CVQCVriの形態が日本語オノマトペに非常に特徴的な形態であるにもかかわらず、あるものは確かにオノマトペであると感じられ、あるものはそうでないと感じられるというのはなぜだろうか。田守らも言うように、ただ主観的な印象で区別するのは合理的でないので、何らかの理由を見出す必要があると思う。かつて筆者が現職の日本語教師にアンケート調査を行なったとき<sup>15</sup>、同じような疑問を持ったことがある。それは「次の語はオノマトペだと思いますか」という質問項目があり、そこにこの形態に相当するオノマトペとして「はっきり」「ぐっすり」「ゆっくり」の3語が含まれていたのだが、ほとんどの教師は「ぐっすり」だけをオノマトペだと認識し、「はっきり」と「ゆっくり」をオノマトペではないと答えた。そこでアンケート回収時に「はっきり」「ゆっくり」も実はオノマトペなのだと告げると、皆口をそろえたように、「これは普通の副詞じゃないか、どうしてこれがオノマトペなのか」と納得しがたいという様子であったのである。しかし、この3語はいずれも語基として「ぐす」「はき」「ゆく」等が認められない点では同格であり、複数の「擬音語・擬態語辞典」にも見出し項目として必ず取り上げられているものである。つまり、現職の教師にとっても、同じ形態をもつオノマトペでも、たしかにオノマトペだと認識するものと、一般の副詞だと思われるものがあるというのは確かなようである。

ある語がオノマトペであると認識されるのはなぜか、また逆に認識されないときそこに何か要素があるのかということについては、次の2つの点が考えられるのではないかと思う。第一にその語の使用頻度、すなわちより基本的で使用頻度が高く、日本語教育においても初級から導入されるような語にはオノマトペであるという意識が薄れるのではないかということ。第二に、その語が共起する動詞が多いもの、すなわち共起制限が弱いかほとんどないかで、どんな動詞とも結びつく語は一般の副詞と認識されるのではないかということである。例えば、「ゆっくり」などはほとんどすべての動作性動詞を修飾する副詞として用いることができる。また「はっきり」は動詞との共起制限はあるものの、「はっきり話してください」「帰国の予定はまだはっきりわかりません」など初級から提示され、日常的にもよく用いられるオノマトペである。そして指導の際にも、これらをわざわざ「オノマトペですよ」と認識させているわけではなく、ほかの一般の副詞「よく」や「早く」などと同等に扱われているのだと思う。

---

<sup>15</sup> 三上(2003)において、教師と学習者に対して行なったアンケート調査である。この調査については、第4章2節でもう一度詳しく報告する。

### 1. 3. 3 「オノマトペ標識」

1. 3. 2項で見た通り、(17)のような特殊な形態を除けば、オノマトペのほとんどは1モーラまたは2モーラの基本形を持つ。但し、「ふ(と)」や「がば」のような、1モーラや2モーラだけで構成されている形態は、現代日本語においては稀であり、促音・撥音・「り」のいずれかを伴うのが普通である。もしくは母音が長音化されたり、語基が繰り返されたりする。そこで促音・撥音・「り」・母音の長音化・反復を日本語オノマトペの音韻・形態的特徴であり、「オノマトペ標識」(onomatopoeic marker)と呼ぶことができる。<sup>16</sup> 続けてこれらの「オノマトペ標識」の一つひとつについて検討した田守・ローレンスの考察を紹介する。<sup>17</sup>

#### (1) 語末の「り」

「ごろり」のような語末に「り」を持つものと「ごろっ」のように語末に促音を持つものを比べると、「ごろり」のほうが転がり方がゆったりしていると感じられる。したがって「り」は「ゆったりした感じ」を表すと考えられる。また「ごろごろ」と「ごろりごろり」を比べると、前者は連続して転がる様子を、後者は転がるという動作(ひと転がり)が繰り返されている様子を表す。この例から「り」は「完了(一区切り)」を表すと推測される。

#### (2) 促音

促音は、語末に起こるものと語中に挿入されるものがあるが、Hamano (1986)が指摘しているように両者は区別されるべきで、語末の促音は「ばたっ」「ぼきっ」「ぼとっ」に見られるように「瞬時性」「スピード感」「急な終わり方」といった意味を表す。一方、語中の促音は「ばっさり」「ばったり」「がっくり」でわかるように、「強調」の挿入辞と見なすことができる。そして「瞬時性」「スピード感」等を表す語末の促音は、一般の語彙に起こることはなく、日本語オノマトペに特有の特徴であると言えるようである。しかし「強調」を表す語中の促音は、「ばっかみたい」「とっても素敵」のように一般語彙にも見られ

<sup>16</sup> Waida, Toshiko (1984) "English and Japanese Onomatopoeic Structures," *Studies in English* 36, Osaka Women's University. より田守・ローレンスが引用。

<sup>17</sup> ここでの考察は、1. 2節「オノマトペと音象徴」で述べたことと重複する部分もある。また例に挙げたオノマトペ等の一部は、筆者が変更している。

ることから、これは必ずしもオノマトペに特徴的であるとは言えない。

### (3) 撥音

撥音は、促音同様語末に現れるものと語中に挿入されるものがある。撥音が1モーラに付加された「ばん」「ぼん」「かん」等や、2モーラの語基に付加された「ばたん」「どきん」「がたん」等のオノマトペは、大半が擬音語であることから、撥音は「共鳴」を表すと考えられる。一方、「ぼんやり」「ふんわり」「げんなり」のように語中に起こる促音は、「強調」を表すと解釈されそうであるが、これらのオノマトペには撥音を抜いた基本形としての対応する形が「ふわり」以外存在しないので、強調辞とは見なさないほうがよいと思われる。また撥音は、オノマトペ以外の語彙では「銀行」「反対」等の漢語はもちろん、和語では「飲んで」「遊んで」などの撥音便にも見られることから、撥音それ自体が日本語オノマトペに特徴的であるとは言えない。ただし、語末に付加される撥音は、他の一般語彙には見られない現象なので、これはオノマトペに特有の特徴であると考えられる。

### (4) 母音の長音化

長母音は「がー」「ぐー」「ぎゃー」「ばーん」「がーん」「ごーん」などの擬声語・擬音語に見られることが多く、自然界の物理的に長い音を模写するのに用いられる。これらは他の語彙に見られる長母音とは意味的に異なっており、やはり日本語オノマトペに特有の特徴であると言える。また擬態語に見られる母音の長音化は「かっとなった」「かーっとなった」の例から分かるように「強調」を表すが、この種のもは「すっごーい」「おっきーい」のように一般語彙にも見られるので、日本語オノマトペに限ったものとは言えない。

### (5) 反復

日本語オノマトペに見られる反復は、音や動作の繰り返さないしは連続を表すが、反復そのものは以下の例の通り、漢語や和語の一般語にも見られる。

a. 延々 堂々    B. 国々 人々    c. 黒々 青々

a. の場合、反復した形のみが存在し、「延」単独では現れない。B. では「複数」を、c. では「強調」を表している。このように反復そのものは一般語彙にも見られるが、音や動作の繰り返さないし連続という意味を表す反復は、オノマトペに独特であると言える。さらに反復形オノマトペに特徴的なこととして以下の5つの点が指摘されている。

- ① 一般語彙が反復形において「連濁」という現象を起こすのに対し、オノマトペでは「連濁」の現象が起こらない。
- ② 助詞との共起に関して、様態副詞として機能するオノマトペは「ころころ（と）転がる」のように「と」の付随が任意的であるが、一般語彙では「赤々と燃える」のように「と」を伴うのが普通である。
- ③ 反復形オノマトペには、「ころころっ」「びっしょびしょ」のように強調形として語末や語中に促音を含んだ異形が存在するが、漢語や和語においては促音の付加や挿入は不可能である。
- ④ 様態副詞として機能するオノマトペのアクセントは、「ぴかぴか光る」「どんどんたたたく」のように「高低低低」になるが、漢語と和語は「えんえん（延々）と続く」「赤々と燃える」のようにそれぞれ「低高高高」「低高高低」というアクセント型になる。
- ⑤ オノマトペでは「丸太がごろごろごとと転がる」のように形態を2回以上反復させることが可能であるが、一般語彙の反復形の場合「\*赤々と燃える」のようには言えない。

#### (6) その他

このほかに日本語オノマトペの音韻・形態に関して特徴的なこととして次の4つが挙げられている。

- ① 現代日本語で語頭に /p/ が起こるのは借用語以外オノマトペだけであり、実際この子音が日本語オノマトペにもっとも多く起こっている。Hamano (1986) によれば、日本語オノマトペの約1/6が /p/ で始まっているとされている。
- ② 語頭に現れにくい子音は /r/ で、この子音で始まるオノマトペはほんの一握りしかない。<sup>18</sup>
- ③ 2モーラを語基に持つオノマトペは「れろれろ」という語を除いて、すべて第1モーラと第2モーラの子音が必ず違っていなければならない。
- ④ オノマトペは有声軟口蓋閉鎖音の鼻音化を受けない。すなわち「がばがば」のような反復形の2番目の要素の始めに起こる /g/ が、一般語彙のように、[ŋ] と発音されることがない。

<sup>18</sup> 複数の擬音語・擬態語辞典を見る限り、語頭が /r/ で始まるオノマトペは「りーん」「りんりん」「らんらん」「るんるん」「れろれろ」ぐらいである。

### 1. 3. 4 語形から見たオノマトペの分類

#### 1. 3. 4. 1 調査と資料の概要

日向・笹目（1999）は、浅野（1978）の『擬音語・擬態語辞典』に取り上げられている擬音語・擬態語を、その語形から分類し資料として提出している。この資料は、日向（1991）で分類された浅野（1978）における804の見出し項目に加え、同辞典において見出し語の同類語、類義語として触れられている小項目843語についても分類を行なったものである。よって分類された擬音語・擬態語の総数は1,647語である。

日向・笹目は「擬音語・擬態語は、新しい語が生まれる創造性、臨時性のものであり、そこに新たなイメージを創出したり、言語の活性化をはかったりする場である」と述べている。また「一般語となった語は別として、語形のわずかな違いを一々見出し語にたて、その意味記述をすることは難しく、一般の辞典にはなじみにくい分野である」とも言っている。ただ語形の面からみれば、それらは基本的な型、またはその変化した型にのっとっていることが多く、基本的な型からまったく逸脱しているわけではないので、そこに擬音語・擬態語の語形を考察する大きな意味があるとしている。

#### 1. 3. 4. 2 擬音語・擬態語の語形による分類

この資料における分類方法としては、まず擬音語・擬態語の基本的な型として以下の4つが立てられている。

- (1) 一回語形
- (2) 重なり語形
- (3) 変則重なり語形
- (4) その他

次に、それぞれの型に促音や長音の付加などによって細かく分けた下位分類が施され、結果として、総数49の型に分けられている。型の分類に用いられる記号として、A, B, C, …は「拍」を、文字で示した箇所はそれが決まって現れることを、そして「一」は長音を示す。以下がその分類である。それぞれの分類型の後ろの数字はその型に該当した擬音語・擬態語の数である、またそれぞれの型に該当する擬音語・擬態語の例は、類型的で数も多いものについては3つ、特殊なものについてはそのすべてを示す。

(1) 一回語形 (882)

- 1. 1 「Aい」型 (6) すい ひょい ぷい(と)
- 1. 1. 1. 「Aいっ」型 (3) ぐいっ ぷいっ ぼいっ
- 1. 1. 2. 「Aいーっ」型 (1) すいーっ
- 1. 2. 「Aん」型 (36) がん(と) ちゃん(と) ぴん(と)
- 1. 3. 「Aっ」型 (43) ぎゅっ(と) どっ(と) ほっ(と)
- 1. 4. 「Aー」型 (37) じゅー(と) ばー びゅー
- 1. 5. 「Aーん」型 (29) うーん ごーん(と) ばーん
- 1. 6. 「Aーっ」型 (44) さーっ(と) じーっ(と) ぼーっ(と)
- 1. 7. 「AB」型 (16) がば(と) はた(と) ひし(と)
- 1. 8. 「ABん」型 (102) きちん(と) どかん ぼつん
- 1. 9. 「ABっ」型 (212) ごそっ(と) ちょこっ(と) ぷつっ(と)
- 1. 10. 「ABり」型 (141) ずるり(と) ひらり(と) ぽかり
- 1. 11. 「AんB」型 (3) ざんぶ むんず わんさ
- 1. 12. 「AっB」型 (13) かっか せっせ(と) ぼっぼ
- 1. 13. 「AんBり」型 (25) うんざり しょんぼり ふんわり
- 1. 14. 「AっBり」型 (103) ぐっすり すっきり ひっそり
- 1. 15. 「AっBら」型 (4) うっすら ぎっちら ちょっくら ふっくら
- 1. 16. 「ABーん」型 (28) うわーん ちゃりーん ぽかーん
- 1. 17. 「AっBん」型 (9) がつたん ぞっこん ぺったん
- 1. 17. 1. 「AっBーん」型 (1) どっかーん
- 1. 18. 「ABーっ」型 (20) くくーっ(と) ずらーっ(と) もわーっ(と)
- 1. 19. その他 (5) ぐーすか そそくさ のほほん ぴーちく ほんわか

(2) 重なり語形 (656)

- 2. 1. 「AんAん」型 (37) がんがん しゃんしゃん ぴんぴん
- 2. 2. 「AっAっ」型 (26) きゃっきゃっ たったっ(と) ぱっぱっ
- 2. 3. 「AーAー」型 (39) ぐーぐー ぎーぎー ひゅーひゅー
- 2. 4. 「ABAB」型 (419)
- 2. 4. 1. A, Bの母音がともに「ア」であるもの (40)

がやがや だらだら ばしゃばしゃ

2. 4. 2. Aの母音が「ア」であり、Bの母音が「ア」以外のもの (40)

かりかり はきはき わくわく

2. 4. 3. A, Bの母音がともに「イ」であるもの (18)

いじいじ じりじり びりびり

2. 4. 4. Aの母音が「イ」であり、Bの母音が「イ」以外のもの (49)

ぴかぴか ぎくぎく いそいそ

2. 4. 5. A, Bの母音がともに「ウ」であるもの (29)

ぐずぐず するする ぶるぶる

2. 4. 6. Aの母音が「ウ」であり、Bの母音が「ウ」以外のもの (75)

うかうか ずきずき くよくよ

2. 4. 7. A, Bの母音がともに「エ」であるもの (1)

でれでれ

2. 4. 8. Aの母音が「エ」であり、Bの母音が「エ」以外のもの (42)

げらげら めきめき ペこペこ

2. 4. 9. A, Bの母音がともに「オ」であるもの (47)

きよろきよろ ごろごろ のそのそ

2. 4. 10. Aの母音が「オ」であり、Bの母音が「オ」以外のもの (78)

ぼかぼか ときどき もぐもぐ

2. 5. 「ABんABん」型 (50) ぐでんぐでん ちりんちりん どしんどしん

2. 6. 「ABりABり」型 (36) しゃなりしゃなり のたりのたり ふわりふわり

2. 7. 「ABらABら」型 (1) うつらうつら

2. 8. 「AっBAっB」型 (10) あっぷあっぷ がっぽがっぽ ゆっさゆっさ

2. 9. 「AっBんAっBん」型 (9) かつちんかつちん こっとんこっとん

ぺったんぺったん

2. 10. 「AっBりAっBり」型 (4) こっくりこっくり のったりのったり

ばったりばったり

2. 11. 「AーんAーん」型 (5) うーんうーん ごーんごーん わーんわーん

2. 12. 「ABっABっ」型 (13) くるっくるっ ばさっばさっ びりっびりっ

2. 13. 「AっBらAっBら」型 (1) ぎっちらぎっちら

2. 14. 「AーっAーっ」型 (2) さーっさーっ ぎーっぎーっ  
 2. 15. 「AっAっAっ」型 (1) はっはっはっ  
 2. 16. 「AんBAんB」型 (1) わんさわんさ  
 2. 17. その他 (1) おそるおそる

(3) 変則重なり語形 (83)

3. 1. 「ABB」型 (1) うふふ  
 3. 1. 1. 「ABB」型 (2) ぶるるっ ぶるるっ  
 3. 2. 「ABCB」型 (22) あたふた うろちよろ ちぐはぐ  
 3. 3. 「ABCD」型 (ただし、A, CおよびB, D子音が同じ) (5)  
     かさこそ がたごと からころ  
 3. 4. 「AらりBらり」型 (3) ちらりほらり ぬらりくらり のらりくらり  
 3. 5. 「AっBらCっDら」型 (1) えっちらおっちら  
 3. 6. 「ABABっ」型 (34) がたがたっ するするっ ばたばたっ  
 3. 7. 「ABんCDん」型 (4) かたんことん がたんごどん からんころん  
 3. 8. その他 (11) からりころり きんきらきん くくくっ ぐぐぐっ  
     こけこっこー こけっこー ずらずらーっ だだだだっ  
     はっはっはっ ぷっぷー ほっかほか

(4) その他 (27)

がたびし がたびし がたんびしん がたんびしん ぎっちらこ  
 きんきんぎらぎら こてんぱん しゅっしゅっぽっぽ しわくちや  
 すたこら すってんころり すってんころりん すってんてん  
 すてんころり ずでんどー ずんぐりむっくり ちょこなん  
 ちょこまか ちんちろりん つーかー どんびしやり はくしよん  
 ぱちくり ひっそりかん ぶつくさ ペしゃんこ ペったんこ

1. 3. 4. 3 まとめと考察

こうして語形別に厳密に分類されたものを見ると、その類型が49にもなるということとがわかったが、もちろんそれらは同じような数で分布しているわけではない。語形として



最も多く見られたのは、「わくわく」「どきどき」のような、オノマトペに典型的な繰り返し語「ABAB」型である。その数は419語であるから、全オノマトペ数の実に4分の1近くを占めていることになる。2番目に多いのは「きらっ」「にこっ」のような「ABっ」型で212語であった。3番目は「ぐるり」「ずばり」などの「ABり」型で141語、4番目は「すっきり」「しっかり」などの「AっBり」型で103語、そして「がちゃん」「ぽかん」などの「ABん」型が102語で続いている。一方、同類のものがなく「その他」に入れられたものも44語あることから、擬音語・擬態語も実に様々な形態をとるものだということがわかる。しかし上位5つの語形をあわせただけで977語にもなること、そしてそこには先に述べた「オノマトペ標識」としての繰り返し、促音、撥音、「り」のどれかが必ず含まれていることから、オノマトペにはその形態にはっきりとした特徴が見出されることが改めて確認できた。

## 1. 4 オノマトペの統語的特徴

1. 4節では、オノマトペの文中での振る舞い、すなわちオノマトペが文成分としてどのような働きを持っているかということについて、先行研究の知見を紹介し考察する。まず、田守・ローレンス（1999）がオノマトペの統語機能、すなわち品詞別の働きに注目した詳細な分析を行っているので、それを中心に、1. 4. 1項で紹介する。1. 4. 2項では、「いらいら」「うとうと」のように、擬態語で繰り返しの形をもつオノマトペについて「情況化」という考え方のもとに考察している星野（1991）の研究を見る。さらにオノマトペの後ろにどのような語が続くのかという視点から、分類と整理を試みた加藤・坂口（1996）の論文を1. 4. 3項で紹介する。そして最後に、1. 4. 4項で「オノマトペの用法一覧」を示し、筆者の考察をまとめることとする。

### 1. 4. 1 オノマトペの統語機能

田守・ローレンス（1999）は、オノマトペの文中における働きを副詞、動詞、名詞、形容詞／形容動詞の4つに分けて分析している。以下にその考察の概要を記述する。<sup>19</sup>

#### 1. 4. 1. 1 副詞用法

オノマトペの用法のうち最も使用頻度が高いと思われるのは副詞としての用法であるが、副詞用法はさらに「様態」「結果」「程度」「頻度」の別に考察が行なわれている。副詞は助詞との共起に様々なパターンが見られるが、その点は1. 4. 1. 5で考察する。以下に副詞としての4つの用法とそれぞれの例文を示す。

##### (1) 様態副詞

ほとんどすべてのオノマトペは、その音韻形態に関係なく、動作の様態ないしは状態を表す「様態副詞」として機能する。以下はそれぞれ音韻形態が異なるオノマトペの様態副詞としての用例である。

---

<sup>19</sup> 引用文献では用例が実例のまま紹介されているが、ここでの用例はその一部を抜粋または書き換えたものと筆者の作例とによっている。

1. ふと外を見ると、雨が降っていた。
2. これはこわれやすいのでそっと扱ってください。
3. 後ろから来た友達に肩をぽんとたたかれた。
4. 電車がトンネルの中をごーと走り抜けた。
5. 子供たちはきゃっきゃっと笑いながら遊んでいる。
6. 夜中に戸をどんどん激しくたたく音がした。
7. 満員電車でぎゅうぎゅう押されて苦しかった。
8. ぴかっと光ったとたん、雷の大きな音がした。
9. 道が凍るとつるりとすべるので気をつけなさい。
10. 部屋を出るとき、ぱたんとドアを閉めるものではない。
11. 晴れた日は山の姿がくつきりと見える。
12. 休日はのんびりと過ごすことが多い。
13. 台風で窓ががたがた鳴ってこわかった。
14. 寒いと思ったら、雪がちらほら舞っていた。
15. 着物を着た女性がしゃなりしゃなり歩いている。
16. 牛の首につけたベルがカランカランと鳴る。

## (2) 結果副詞

結果副詞として機能できるものは、基本的に次の4種の音韻形態を持ったオノマトペに限られる。以下はその用例である。

1. 一日中立ち仕事をしてくたくたに疲れた。(2モーラの反復形)
2. 冷凍庫に入れたジュースがかちんかちんに凍った。(2モーラの反復形の強調形)
3. こんがりと焼いたトーストがおいしい。(CVNCVriの形態)
4. 長かった髪をぱっさりと切った。(CVQCVriの形態)

これらの例に表れる動詞はすべて対象の状態の変化を引き起こす「起動動詞」と呼ばれるものである。

## (3) 程度副詞

程度副詞とは、状態性の意味を持つ語にかかってその程度を限定する副詞である。<sup>20</sup> 程度副詞としての用法は比較的少ないが、その場合、音韻形態は次の3種に限られる。以下はその用例である。

1. 塾に通い始めてから成績がどんどん上がった。(2モーラの反復形)
2. ワインを飲んだら、顔がほんのりと赤くなった。(CVN CV r iの形態)
3. 父は最近めっきり体力が落ちたと言って嘆いている。(CVQ CV r iの形態)

#### (4) 頻度副詞

頻度副詞は、動きそのものの実現のされ方ではなく、実現された事実の回数的なあり方を表す。<sup>21</sup> 頻度副詞として機能するオノマトペは大変少ないが以下がその用例である。

1. あの店は安くておいしいのでちょいちょい行っています。
2. 学生達は卒業してもちょくちょく教授のところに来ているようです。

#### 1. 4. 1. 2 動詞用法

日本語オノマトペはそれだけで直接動詞として機能することはできないが、それ自体あるいはその一部の要素が少数の動詞語尾と結びついて、動詞の役割を果たすことができる。以下にオノマトペの動詞用法を大きく3つに分けて提示する。

##### (1) 「一する」動詞

最も生産的なタイプで、一番多く見られるのが「一する」という動詞と結びつく場合である。「オノマトペ動詞」という呼び方をすることもある。「一する」動詞への組み入れは漢語から来た名詞や借用語との結びつき(例:勉強する、研究する、アップする、デートする等)にも見られる一般的な現象できわめて生産的であるが、すべてのオノマトペに適用するわけではない。どのようなオノマトペに対してこの組み入れが可能かということに関しては、あまりはっきりしていないようだが、<sup>22</sup> 次のようなことが言われている。まず「ざわざわ」「どンドン」など少数の例外を除けば、この組み入れは擬態語に限られる。さらに「うきうきする」「しんみりする」のような擬情語は、例外なくすべて「一する」動詞

<sup>20</sup> 工藤 (1983) による。

<sup>21</sup> 仁田 (1983) による。

<sup>22</sup> 西尾 (1981) によれば、天沼 (1973) の『擬音語・擬態語辞典』の全見出し語 1547 語のうち、約 34%にあたる 523 語が、「する」を伴って使うことのできるオノマトペである。

への組み入れが可能である。以下が、結びつくオノマトペの形態別語例である。

1. ほっとする    むっとする    じっとする
2. しんとする    しゃんとする    つんとする
3. どきどきする    いらいらする    にこにこする
4. うっとりする    さっぱりする    ぐったりする
5. うんざりする    ぼんやりする    ひんやりする
6. にこっとする    きちっとする    ぎくっとする
7. がらんとする    つるんとする    しょぼんとする
8. うろちょろする    どたばたする    どぎまぎする

さてここで、「する」を伴って動詞として用いられるオノマトペのうち、実際には「一した」「一している」の形でしか使われないものがあるので、その点に注意しておきたい。例えば、「ほっと」「どきどき」「にこにこ」などのいわゆる擬情語は、「無事だと聞いてほっとしました」「試験の前はどきどきして眠れなかった」「舞台の上ではなるべくにこにこしなさい」など、他の「一する」動詞と同様に、文中において様々な活用形で用いることができる。ところが、「たっぷり」などは、「俳優たちはみなたっぷりした衣装を着ていた」「このスーツは胴回りがたっぷりしていて楽だ」のように用いられ、「\*スーツがたっぷりしました」「\*衣装をたっぷりしてください」（\*は不適格な文例）のように「する」を他の活用形で用いることは普通できない。もちろん「たっぷり」には「料理がたっぷりあってみな大満足だった」のような様態副詞としての用法もあるわけだが、いわゆる辞書形で「一する」動詞への組み入れが可能なおノマトペといっても、その働きが異なる場合があることには留意する必要があると思う。

この点に関して、西尾（1981, p. 83-86）は、「擬音語・擬態語+する」（本論文でいう「オノマトペ+する」）のアスペクト形式に注目して、オノマトペを以下の4つのグループに分類している。<sup>23</sup>

1. ほとんど「～している」「～した（連体用法のみ）」の形で使われるだけで、動的な過程を表すことがなく、単なる状態を表し、形容詞と通じる性格をもっているもの  
例：ほっそりする    あっさりする    がっしりする    くりっとする    すらりとする

<sup>23</sup> 以下の記述は、西尾（1981）からの引用であるが、用法分類や用例には便宜上、筆者が番号をふっている。また、用例なども一部省略したり変更したりしている。

ちまちまする ぴんぴんする ふっくらする よぼよぼする<sup>24</sup> 等

2. 「する」の形だけで使われて、「している」を欠くもの。これらは、瞬間的な動きを表す意味が強く、「している」の形をとって継続の意味を実現できない。

例：ちくつとする はつとする びくつとする ぎくりとする ひやりとする  
どきんとする ぞくぞくつとする 等

3. 「する」とそれに対立する「している」の形を持ち、「している」は「変化の結果の継続」を意味する。

例：ほつとする ぐったりする

4. 「する」とそれに対立する「している」の形を持ち、「している」は「動作の継続」を意味する。重複形式のものがわりあいに多い。

例：ぶるぶるする うろうろする びくびくする ひやひやする やきもきする 等

## (2) 「一つく」動詞

「一する動詞」の次によく見られるのは、接尾辞「一つく」による派生である。このタイプは対応する2モーラ反復形のオノマトペと意味的に関係していてその語基を「一つく」に組み入れることで派生したと考えられる。以下がその対応するオノマトペと派生したオノマトペの語例である。(下線がオノマトペから由来していると思われる成分)

いらいら⇒いらつく べとべと⇒べとつく むかむか⇒むかつく

またこれらのオノマトペには否定的な意味を持つという共通の意味特徴があることがわかる。そしてよく似た意味のオノマトペ二つのうち、否定的な意味を持つものは「一つく」への組み入れが可能だが、肯定的な意味を持つものはそれができないということは次の例から明らかになっている。(＊は不適格な語)

ぎらぎら⇒ぎらつく にやにや⇒にやつく  
きらきら⇒＊きらつく にこにこ⇒＊にこつく

<sup>24</sup> 鷺見 (1996) は、条件節を伴えば、これらの語も何ら問題なく「する」の形で使えるものがあるとし、西尾の分類とその意味解釈に対して批判的に論じているが、ここでは両者の論点の違いについて触れない。

但し、否定的な意味を表すオノマトペがすべてこの組み入れを受けるかというとはそうではない。以下のようなオノマトペからはこの「一つく」動詞を作ることができない。

うかうか⇒\*うかつく      ぼやぼや⇒\*ぼやつく

### (3) その他

「一する」「一つく」以外にオノマトペから派生したと思われる動詞に以下のようなものがある。

1. 「一めく」      きらきら⇒きらめく      よろよろ⇒よろめく
2. 「一ける」      にやにや⇒にやける      とろとろ⇒とろける
3. 「一る」      ぐずぐず⇒ぐずる      ちびちび⇒ちびる

また、以下の動詞も意味的にオノマトペと関係していると思われる。

4. ゆるゆる⇔ゆるまる      くるくる⇔くるまる
5. ゆらゆら⇔ゆれる、ゆらす
6. ころころ⇔ころがす、ころがる、ころげる
7. ぼやぼや⇔ぼやかす      ふやふや⇔ふやかす
8. いらいら⇔いらだつ      うきうき⇔うきだつ
9. ひやひや⇔ひやす      ひたひた⇔ひたす
10. そよそよ⇔そよぐ      ゆらゆら⇔ゆらぐ

## 1. 4. 1. 3      名詞用法

### (1) 単独の名詞

オノマトペが単独で名詞として用いられることがある。典型的には「大きいワンワンが来た」「冷たいものを食べるとぼんぼん、痛くなるよ」など、幼児語に見られるのであるが、2モーラの反復形のあるものは以下のように普通の名詞としても用いられる。

1. 渋滞がひどくドライバーのいらいらが募る。
2. ひらひらのついたスカートが流行している。

なお、これらは様態副詞として用いられるとき、アクセント型が異なることに注意しておく必要がある。すなわち、「いらいらする」「ひらひら舞う」のように動詞、または副詞として用いられる場合のアクセントパターンは<頭高>であるが、上記のような名詞とし

での用法では、アクセントパターンが<平板>になるという点である。

## (2) 複合名詞

次にオノマトペが関係する複合名詞は、副詞的なオノマトペ+動詞からなるもの、オノマトペ+名詞、混成語（オノマトペの要素と名詞の一部が組み合わせられたもの）が見られる。以下はその種類と用例である。

### 1. 副詞として機能する2モーラ反復形のオノマトペ+動詞

→オノマトペは形態的变化を受けない。但し、ここでもアクセント型は変化する。

(例) きりきり舞い      きりきり舞う  
のろのろ運転      のろのろ運転する

### 2. 結果副詞として機能する2モーラ反復形のオノマトペ+動詞

→反復形オノマトペが非反復形になる

(例) びしょ濡れ      びしょびしょ濡れる  
ごちゃ混ぜ      ごちゃごちゃに混ぜる

### 3. CVCVQという形態のオノマトペ+動詞

→促音と助詞「と」が脱落する

(例) ごろ寝      ごろっと寝る  
がぶ飲み      がぶっと飲む

### 4. オノマトペ+名詞

(例) きらきら星      にこにこ顔      どっきりカメラ      ほんわかムード

### 5. 混成語

(例) こそ泥      がり勉      どか雪

## 1. 4. 1. 4 形容詞／形容動詞用法

オノマトペが単独で形容詞として直接機能することはないが、以下に見るように結果副詞として機能する2モーラのオノマトペは形容動詞的に振舞う。

(例) 靴をびかびかに磨く      びかびかの靴      靴がびかびかだ

オノマトペが関与している形容詞は、少数だが存在する。(下線がオノマトペから由来していると思われる成分)



1. オノマトペ+形容詞を導く接尾辞（しい）  
 (例) けばけばしい      とげとげしい
2. 形容詞+オノマトペ語基の接頭辞  
 (例) ほろ苦い      ひよろ長い
3. 2モーラ反復形のオノマトペと関係があると思われる形容詞（どちらからどちらが派生したかは明らかではない）  
 (例) くどい ⇔ くどくど      ぼろい ⇔ ぼろぼろ
4. オノマトペが関わっていると思われる形容動詞  
 (例) しとやか      ゆるやか      にこやか

#### 1. 4. 1. 5 助詞との共起について

次に、オノマトペは副詞として機能するとき、その音韻形態および統語的・意味的機能によって助詞との共起の仕方が異なるのだが、それらは以下のように5つに分類されている。

##### (1) 助詞「と」を随意的に伴うもの

1. 様態副詞として機能する2モーラ反復形のオノマトペ  
 (例) カタカタ (と) 鳴らす      ぐるぐる (と) 回す      がんがん (と) 響く
2. 様態副詞または結果副詞として機能する「(C)VNCV r i」「(C)VQCV r i」という音韻形態のオノマトペ  
 (例) はっきり (と) わかる      ぼんやり (と) 見える      こんがり (と) 焼く
3. 様態副詞として機能し、2モーラの部分的に反復した形態を持つオノマトペ  
 (例) からころ (と) 音をたてる      ぺちやくちや (と) おしゃべりする

##### (2) 通常助詞を伴わないもの

1. 頻度副詞として機能する2モーラ反復形のオノマトペ  
 (例) ちょいちょい来る      どしどし海外に出る
2. 程度副詞として機能するオノマトペ  
 (例) どんどんできる      グングン下がる      すっかりなくなる
3. 程度副詞として機能するが、「と」を伴うこともあるオノマトペ  
 (例) めっきり (と) 減る      めきめき (と) 力をつける

(3) 「と」を伴ったほうが好ましいもの

1. 「(C)V C V r i」または「C V C V N」の反復形をもつオノマトペ

(例) ふわりふわりと飛ぶ      バシャンバシャンと打つ

(これらのオノマトペには「と」を伴わない用例も見られるが、一般に「と」があった方が安定している)

(4) 「と」を義務的に伴うもの

1. 上記(1)～(3)以外の形態を持ち様態副詞として機能するオノマトペ

(例) ぱつと見る      ポンとたたく      グルッと回る      ごろんと寝る

2. 自然界の現実の音を忠実に模倣した臨時のオノマトペ

(例) 雷がバアリバリバリッと鳴った      突然ドッカーンと爆発した

3. 反復形のオノマトペの語末に促音が付加されたもの

(例) ざぶざぶつと洗う      グルグルッと回す

これらの例では、語末の促音により不規則な素早い動きが表されている。そして「グルグル回す」と「グルグルッと回す」を比較すると、後者のほうが生き生きとした臨場感を与えている、つまりよりオノマトペ的で語彙性が低いということになる。ここで「と」が必然であることは次の2つの事柄によって動機付けられている。

- ① 臨時の擬音オノマトペの場合のように、用法が生き生きとして非慣習的なものである場合に「と」が要求される。
- ② 促音 /Q/ の生起は後続の子音の生起に依存していて、「と」は促音が起こる環境を提供している。つまり、もし「と」がなかったら、促音+母音という、日本語では不可能な組み合わせが生じる可能性があるからである。

(5) 「に」を義務的に伴うもの

1. 結果副詞として機能する2モーラ反復形のオノマトペ

(例) ぴかぴかに磨く      くたくたに疲れる

2. 結果副詞として機能する「C V C V N」の反復形を持つオノマトペ

(例) べろんべろんに酔っ払う      かちんかちんに固まる

#### 1. 4. 1. 6 引用用法

オノマトペの引用用法については以下のようなことが言われている。

- (1) 擬音オノマトペは擬態オノマトペよりも引用的に用いられやすい。

(例) 「きゃーっ」という叫び声

(例) \* 「めきめき」という程度の上達のしかた

- (2) 「と」を義務的に伴うオノマトペは「と」を必要としないものよりも引用的に用いられやすい。

(例) ? 「にたっ」という笑い方

(例) \* 「ぼんやり」という見方

- (3) 異形はそのもとのオノマトペよりも引用的に用いられやすい。

(例) ? 「にたっ」という笑い方

(例) 「にたーっ」という笑い方

- (4) 2モーラ反復形の擬態オノマトペは「CVN CV r i」または「CVQ CV r i」という形態のオノマトペより引用として用いられやすい。

(例) 「くるくるっ」と回る

(例) \* 「じっくり」と煮る

日本語では「と」が直接引用の助詞であるから、「と」の義務的な付加と引用用法には密接な関係がある。引用符は、その項目を文の他の部分から切り離し、それが非言語的ないしはパラ言語的な名称として提示されていることを示唆するので、引用的に用いられたオノマトペは話者にとって、その音や様態が語彙化されて慣習的なものではない、つまりよりオノマトペ的であり、音や様態の生き生きした表現であるということになる。

#### 1. 4. 1. 7 文外独立用法

文外独立用法においても、引用用法と同様、以下のようなことが観察される。

- (1) 臨時の擬音オノマトペが独立してもっとも用いられやすい。

(例) ピンポーン！ドアのベルが鳴った。

- (2) 「と」を必要とするオノマトペは「と」を必要としないものよりも独立して用いられやすい。

(例) ? びりびり。彼女が手紙を破った。

(例) どさり。雪が地面に落ちた。

(3) 異形はもとのオノマトペより独立して用いられやすい。

(例) ?びりびり。彼女が手紙を破った。

(例) びりびりっ。彼女が手紙を破った。

(4) 具体的な描写力を持つオノマトペはこのような描写力に欠けるものよりも独立して用いられやすい。

(例) ?くるくる。風車が回っている。

(例) \*ゆっくり。その事件について説明した。

(5) 「CVNCVri」または「CVQCVri」という音韻形態を持つオノマトペがもっとも用いられにくい。

(例) \*すんなり。結婚が決まった。

(例) \*じっくり。ご飯を炊いた。

#### 1. 4. 1. 8 動詞省略

オノマトペは副詞として動詞が欠如した文に起こる場合がある。これは新聞の見出しや広告などによく見られる。

(1) 叙述要素「一する」「一だ」が省略されたもの

(例) 金庫前でうろうろ

(例) 雨でデパートはがらがら

(2) 一般動詞が省略されたもの

(例) 関東地方ぐらり

(例) 波間にかもめプカプカ

ここで動詞省略がなぜ可能なのかというと、これらのオノマトペが共起できる動詞が強く制限されているからである。つまり「ぐらり」といえば「揺れる」というように、動詞が唯一無二に復元されるか、「プカプカ」のようにまたは2つ以上の動詞に復元できても文脈で1つの動詞が省略されている、とい解釈が示唆されるからである。ところが、文脈からどの動詞が省略されているかはっきりわかる場合でも、動詞の省略が出来ないオノマトペもある。

(例) \*ボーイフレンドに電話をかけると母親に叱られるので、女の子は部屋でこっ

そり。

(例) \*その生徒は、読み方が速すぎると先生に注意されて、ゆっくり。

これらの、動詞が省略できないオノマトペは、オノマトペ度が極めて低いということを示唆している。

#### 1. 4. 2 「情況化」によるオノマトペの分類

星野(1991)は、水谷静夫が著した試案文法の構文解析に当てはめ、擬態語を「情況語」として捕らえ「ト・ニ・α」によって「情況化」が施されるとしている。そして【表1】にあるように後接成分を横軸としたマトリクスとしてオノマトペの用法を分類し、4つの資料から採集した擬態語の用例を配置している。

【表1】 a b a b型擬態語の用法——接続——

擬態語	ε 情況化					と情況化←情況語・体連語 →連体化					格要素		陳述	
	数	～する	～V	～A	～N	～と V	～と A	～と する なる	～に V	～の	～が	～を	ε	～だ
いらいら	2	1				*		*					1	
うとうと▲	1	*	+			+		1						
おずおず	2	1	+			1								
もじもじ	2	1	1			+							*	
ざわざわ	3	1	2			*							*	
ぜいぜい	2	+	1	1										
ちらちら	11	*	0			1								
ごつごつ	2	1	1	*		+	+							
べとべと	2	1				+			1					+
ごたごた	3		+			1			+		1	1		
てかてか	3		1						2					

ばらばら	4		*			*			2	1				1
ぐるぐる	5		4			*			1					
くるくる	6		2		1	3								
そろそろ	6		3		2	1								
ほやほや▲	1					+				+				1

注1：数字は資料中に現れた語の使用頻度。\*は国研『現代雑誌九十種の用語用字五十音順語意表・採集カード』マイクロフィッシュに見出された用法、+印は『擬音語・擬態語辞典』例文の用法である。

注2：▲は用例が一文ずつであるが他にない用法があるので表に載せた。

星野は、この分類を4種の資料を合わせて複数回使用されている擬態語を分析の対象としているが、結果的にそれらはいわゆる繰り返す語形のみになっている。さらに対象とした語のうち構文上の用法が2種以上に及ぶ14語について分析していて、「わずか14語ではあるが擬態語が接続するほぼすべての構文要素をカバーする」としている。しかし、ここで取り上げられていない擬音語や擬声語、また繰り返しの語形をとらない擬態語、資料に一度しか出現しなかったその他のオノマトペの用法についてもこの表ですべてカバーしうるのはさらに考察の余地があると思われる。

#### 1. 4. 3 後接成分によるオノマトペの分類

加藤・坂口（1996）は、星野（1991）の分類が助詞の問題や品詞性・呼応の問題を同一軸上に並べて論じていることに疑問があるとし、オノマトペの後接成分について、【表2】のような階層性のある分類を試みている。

【表2】加藤久雄・坂口昌子（1996）「後接成分とオノマトペの性質について」より

タイプ		オノマトペ				後接成分									
						φ			ト			ニ			
						ダ	スル	用	ダ	スル	用	ダ	スル	用	
A系	併用型		ツルツル	クシャクシャ	ヌメヌメ	○	○	○	—	○	○	—	○	○	
	形式動詞型		サラサラ	ゴワゴワ		○	○	×	—	○	×	—	○	×	
	一般動詞型		ビリビリ	ビッショリ		○	×	○	—	×	○	—	×	○	
	例外	程度副詞	タップリ				○	○	○	—	○	○	—	×	×
		結果副詞	カチカチ	キチキチ	カラカラ		○	×	×	—	×	×	—	○	○
B系	併用型		アッサリ	イソイソ	ウネウネ	×	○	○	—	○	○	—	×	×	
	形式動詞型	擬情語	アタフタ	クラクラ	ムッ	×	○	×	—	○	×	—	×	×	
	一般動詞	擬音語	カサカサ	ガラリ	ダラリ	×	×	○	—	×	○	—	×	×	
	例外	副詞	ウッカリ			×	○	○	—	×	×	—	×	×	

このように、それぞれのオノマトペの後接成分を助詞とそれに続く要素の組み合わせによって階層的に分類するという視点は非常に重要であると思う。ただ、加藤・坂口も「まとめ」の項で述べているように、そもそも助詞「ト」と「ニ」は「ダ」と共起しないので、「φ格」「ト格」「ニ格」と「ダ」「スル」「用」の後接成分との組み合わせですべてのオノマトペの用法がすっきりと整理できるかどうかは疑問が残る。またこの分類に先立って、一般動詞は「スル」や「ナル」を除いたものという記述があるにも関わらず、形式動詞である「スル」と同様にオノマトペと共起して独特の用法を持つ「ナル」についてはこの表で特に項目化されていない。さらに例えば「ダラリ」というオノマトペが「変化の過程を持たず、結果の状態を表すことのできないオノマトペ」としてB系に分類されているが、「上げていた手が疲れてだんだんダラリと下がってきた」のような文においては変化の結果が示唆されているとも言えるのではないだろうか。そう考えるとA、Bの二系列に分類しきることの難しさを感じるというより、このようなそれぞれのオノマトペが「変化の結果」の意味を内包しているかどうかという議論が、統語的分類にとってどれほど意味があるのかいささか疑問である。

ところで、筆者も以前、星野（1991）や加藤・坂口（1996）の分類を参考に初級における

オノマトペ指導のための試みとして、以下の【表3】のような分類を考えた。<sup>25</sup>

【表3】 「初級日本語教育におけるオノマトペの用法分類」

a. ～と V (動詞)	例: 「ワン」と泣く, ちゃんと勉強する
b. ～に V (動詞)	例: かちかちに固まる, ぴかぴかにみがく
c. ～φ V (動詞)	例: そろそろ歩く, ゆっくり話す
d. ～と・に・φ する/なる	例: わくわくする, ぼろぼろになる
e. ～と・に・φ A (形容詞)	例: ずっしりと重い, ふんわり柔らかい
f. ～の・φ N (名詞)	例: さらさらの髪, のろのろ運転
g. ～だ・です・φ	例: ばらばらだ, カメラでパチリ

しかしこの分類においても、例えば「ゆっくり」はc.「ゆっくり話す」に分類されているものの、a.の「ゆっくりと話す」という用法もあるし、また「ぼろぼろ」はd.「ぼろぼろになる」以外にg.「ぼろぼろだ」「ぼろぼろの服」などとも言えることから、この表でも必ずしもすべてのオノマトペが統語的に分類できているとは言えない。つまり助詞の後接が随意的であるかどうかということも含めて、それぞれのオノマトペが複数の用法を持ち様々な文中での振る舞いを見せるのであるから、すべてのオノマトペをそれぞれが持つ用法別に例外なく分類しようとする、その分類項目はかなりの数にのぼりまた分類としても複雑になることが予想される。

そこで、【表2】や【表3】のように、まず用法を項目として立てて、そこにそれぞれのオノマトペを分類しあてはめるのではなく、考えられる用法をすべて列挙した上で、それぞれのオノマトペがそのうちのどの用法を持つのかという記述の方法を取るほうが、指導や学習という点においてもよいのではないかと考える。

それは、オノマトペの用法を観察しそれらを類型にあてはめて眺めることは言語学的には価値のあることかもしれないが、教育という側面においては、学習者にとって個々のオノマトペがどう使えるのかという情報のほうが必要なのではないかと考えるからである。

<sup>25</sup> 三上(2002)における試案である。



#### 1. 4. 4 オノマトペの用法一覧

ここで、オノマトペがどのような助詞を伴い、文成分としてどのような働きを持つかというのを改めて考察し、オノマトペの持つ用法を一覧として記述することを試みる。先にも考察した通り、オノマトペがただ1つの用法を持つことはむしろ珍しく、以下に示す用法をいくつか併せ持つほうが一般的だと考えられる。よって、以下の各用法に例として挙げてあるオノマトペが、その用法だけを持つことを意味するのではないことは言うまでもないことである。

##### <オノマトペの用法一覧>

#### ① 一般の動詞に接続し、様態副詞または結果副詞として機能する

1. 「～動詞」(助詞は伴わない)

例：すっかり忘れる

2. 「～(と)動詞」(助詞「と」の付随が任意的)

例：のんびり(と)待つ

3. 「～と動詞」(助詞「と」を伴う)

例：ごろんと横になる

4. 「～に動詞」(助詞「に」を伴う)

例：くたくたに疲れる

#### ② 動詞「する」に接続し、動詞として機能する

5. 「～する」(助詞は伴わない)

例：ドキドキする

6. 「～とする」(助詞「と」を伴う)

例：ほっとする

7. 「～(と)する」(助詞「と」の付随が任意的)

例：ぼんやり(と)する

#### ③ 動詞「する」または「なる」に接続して結果副詞、様態副詞として機能する(助詞

「に」または「と」を伴う)

8. 「～にする・なる」(助詞「に」を伴う)

例：靴をぴかぴかにする／靴がぴかぴかになる

9. 「～とする・なる」(助詞「と」を伴う)

例：教室がしーんとなる／しーんとする

4 形容詞として機能する

10. 「～(と)した」「～(と)している」

例：がっちりした体型, 裏通りはひっそりとしている

5 形容詞・形容動詞に接続し、副詞として機能する(助詞「と」の付随が任意的)

11. 「～(と)形容詞」

例：ぎらぎら(と)まぶしい

6 名詞に接続し、形容動詞として機能する(助詞「の」の付随が任意的)

12. 「～(の)名詞」

例：ぼろぼろの服, きらきら星

7 単独の名詞または複合名詞として機能する

13. 「名詞」

例：いらいらが増す

14. 「複合名詞」

例：のろのろ運転, びっくり箱

8 「だ／です」等を伴って述語になる

15. 「～だ／です」

例：ゆっくりだ

9 その他

16. 引用用法

例：「リーン、リーン」と鳴る

17. 文外独立用法

例：「ピンポン！」

18. 動詞省略用法

例：足元ほかほか

以上、オノマトペの文中での働きは大きく分けて9つに、下位分類をすれば18に分けることができた。オノマトペが、文中において実際どのような用法で多く用いられるのかということは、第4章5節「オノマトペの統語的特徴からの教育」のところで、日本語教科書や教材の分析を通して考察を行うこととする。

## 1. 5 オノマトペの定義

1. 5節では、1. 1節から1. 4節における様々な観点からのオノマトペの先行研究の成果をふまえ、第1章の総括として、本論文におけるオノマトペの定義を行う。

日本語に「オノマトペ」、あるいはより一般的な呼称としての「擬音語・擬態語」という語彙が豊富にあることは、誰も認めるところであろう。しかし、ではオノマトペとはいったいどの語からどの語までを指すのか、ということは明らかにされているだろうか。オノマトペというと、「ワンワン」「ザーザー」等、声や音を表す語、また「くるり」「ざらざら」等、動きや様子を具体的に描写する語がまずイメージされる。このうち、前者のいわゆる「擬音語」をオノマトペとすることに異論が唱えられることはない。だが、後者のいわゆる「擬態語」については、「ぐっすり」「ぶらぶら」等、母語話者の語感としても、また多くの先行研究や辞典等でも擬態語として扱われている語と、「はっきり」「きちんと」等、従来一般の副詞と認識されてきた語との境界はどこで引くのか、ということが問題となるのである。第1章1節から4節において、先行研究の成果を基に、日本語オノマトペを様々な観点から考察してきたのは、まさにこの問いに答えるためでもあった。

オノマトペとはいったいどのような語群なのであろうか。国語辞典や国文法における品詞分類を見ても、「オノマトペ」または「擬音語」「擬態語」というラベルは見当たらない。それらはほとんどすべて〔副詞〕あるいは〔形容動詞〕として、また一部の語は〔名詞〕〔サ変動詞〕という品詞として分類されているのである。さらに、数種の擬音語・擬態語辞典においても収録されている語数はほぼ同じでも、見出し語として扱っている擬音語・擬態語はそれぞれ異なるのである。また、玉村（2000）は、音象徴語<sup>26</sup>の特性の1つとして、「ヴァリエーションが多いこと」、「新規の造語が容易である」ということから辞書に採録されないものが多いと言っているが、そのことからオノマトペの範疇を定めることが困難であることがわかる。

ここではまず、1. 5. 1項で、「語彙性」と「オノマトペ度」という観点からオノマトペの認定を提案し、オノマトペ語彙の独自性として12の要因をあげている田守・ローレンス（1999）の論考を見る。続けて1. 5. 2項では、オノマトペの範疇と定義を考える手掛かりとして、角岡（2004）が唱えた「語彙化」と「境界オノマトペ」という考え方を紹

---

<sup>26</sup> 玉村は、オノマトペという語は用いず、いわゆる擬音語・擬態語をまとめて音象徴語と呼んでいる。

介する。1. 5. 3項では、日本語教育の分野での先行研究においてオノマトペと認定された語が、既存の擬音語・擬態語辞典においてどのように扱われているかを比較・検討し、それらがオノマトペと認定され得るかという観点から考察する。次に1. 5. 4項で、オノマトペに見られるいくつかの特徴から他の語との弁別性という点を考察し、語がオノマトペとされる条件を考える。そして、最後に1. 5. 5項で、本論文の目指すところである日本語教育のためのオノマトペのリソース化という立場から、オノマトペとは何か、従来一般の副詞とされてきた語の中でオノマトペと認定できるのはどの語かという、本論文におけるオノマトペの定義を行うこととする。

#### 1. 5. 1 「語彙性」と「オノマトペ度」

田守・ローレンス（前掲）は、「語はどのような場合にオノマトペであるか」という問いに答えるために、オノマトペと推測される語の「語彙性 (lexicality) およびオノマトペ度 (mimmeticity)」というものを提案している。「語彙性」とは、その語が言語の中でどれほど完全に語として機能しているかという程度であり、「オノマトペ度」とは、ある語が話者によって直接的な模倣として認識される程度、すなわちその語がそれによって指示される音、様態、状態の非恣意的な現れとして認識される程度である。そして両者は、上で定義した意味において正反対の関係にあると仮定される。すなわち、語彙性の一番低いオノマトペがもっとも具体的な描写力に富み、類像的で、直接的で生き生きとして臨場感がある、等々、もっともオノマトペ的である。一方、語彙性の一番高いものはその逆である。この語彙性、オノマトペ度というものを判定するために、以下の8つの基準があげられている。これらの基準をより多く満たすものが「オノマトペ度」が高く、「語彙性」が低いと見なされるということである。8つの基準とは次の通りである。

- a. 音を表す
- b. 「と」を義務的に伴う
- c. 引用的に用いることができる
- d. 文外で独立して用いることができる
- e. 「XというY」構造に用いることができる
- f. 具体的な描写力がある

- g. 漫画にラベルとして起こる
- h. 「と」の代わりに「て」を伴うことができる

この a. から h. までの基準を具体的な語にあてはめたものが以下の表である。

【表4】 「語のオノマトペ度」 (田守・ローレンス (1999) p.201 より)

	a	b	c	d	e	f	g	h
ドッカーン	○	○	○	○	○	○	○	○
がさがさっ	○	○	○	○	○	○	○	○
ぼきっ	○	○	○	○	○	○	○	○
がさがさ	○	×	○	??	○	○	○	×
にやっ	×	○	○	??	?	○	○	?
くるくる	×	×	??	×	×	○	○	×
こそっ	×	○	??	×	×	×	○	?
いらいら	×	×	×	×	×	○	○	×
がっぷり	×	×	×	×	×	○	?	×
ゆっくり	×	×	×	×	×	×	×	×
めきめき	×	×	×	×	×	×	×	×

この表を見ると、「ドッカーン」「がさがさっ」「ぼきっ」のような臨時の擬音オノマトペがすべての基準を満たしている、つまり最もオノマトペ的であると言える。反対に、「ゆっくり」や「めきめき」はどの基準も満たしていないため、最もオノマトペ的でないということが言えるのである。ただこの基準は、ある語がオノマトペであるかどうかに関する話者の判断の基盤とはなるが、これだけで、特定の語が明確に定義できる形でオノマトペと呼ばれる語彙層に属しているか否か、という問題は依然として残されている。

そこで田守・ローレンスは、日本語オノマトペの語彙的独自性（一般語彙から区別できるかどうかということ）を立証するため、オノマトペの統語的・形態的独自性、音韻的独自性という観点から考察を加えた結果、「日本語には、音韻的、形態的、統語的振る舞いにおいてその独自性を示すオノマトペ語彙が存在するようである。日本語では、伝統的に擬

声語・擬音語・擬態語と呼ばれる語は、複数の根拠に基づいてこの独自性を示す一連の語とおおむね同一延長線上にある」との結論に達している。また「「ゆっくり」「はっきり」「ちょっと」といった語に関して、日本語話者はそれらを伝統的なオノマトペという範疇に属しているとは感じていない」とも言っている。

田守らによれば、伝統的なオノマトペ語彙の独自性は、以下の12の要因に基いているとされている。

- a. 連濁の適用を受けない：オノマトペの内部の形態素の始めの無声阻害音はけっして有声化を受けない。
- b. 有声軟口蓋閉鎖音の鼻音化の適用を受けない：「がばがば」のような反復形の2番目の要素の最初に起こる/g/は、一般語彙の場合  $g > \eta$  という交代を示す話者によって[ŋ]と発音されることはけっしてない。
- c.  $p > h$  交替を受けない：オノマトペはある一般語彙の最初の形態素以外の形態素に見られる  $p > h$  交替をけっして示さない。
- d. 語頭の/p/はオノマトペに際立って起こるが、本来語や漢語には起こらない。
- e. 2モーラ反復形の様態副詞的なオノマトペの多くがQ（著者注：撥音）の語末付加を受けるが、この種の接辞付加あるいは拡張は反復形の一般語彙や漢語にはけっして見られない。
- f. 2モーラ反復形の結果副詞的なオノマトペは語中にQが挿入されるが、この種の接辞挿入あるいは拡張は反復形の一般語彙や漢語にはけっして見られない。
- g. 「り」の語末付加はオノマトペに限られる。
- h. Qの語末付加はオノマトペに限られる。
- i. Nの語末付加はオノマトペに限られる。
- j. 反復形のオノマトペは語幹をさらに反復してその形態を拡張することができるが、このようなことは本来語や漢語にはけっして起こらない。
- k. 2モーラ反復形の様態副詞的なオノマトペは「と」を随意的に伴うが、本来語の反復形は「と」を伴うのが普通であり、漢語の反復形は「と」を義務的に伴う。
- l. 様態副詞として機能する2モーラ反復形のオノマトペは、高低低低というアクセント型を持つが、反復形の漢語および本来語はそれぞれ低高高高および低高高低というアクセント型を持つ。（田守・ローレンス（1999）pp. 210—211 より）

これら 12 の要因が合わさって、「オノマトペとして認められる多数の日本語語彙の分類を支持する」ことになるというわけだが、さらに、「オノマトペが常にひらがなないしカタカナのいずれかで書かれるのに対し、漢語および本来語が通常漢字で書かれるということも、範疇化の議論とまったく無関係ではないと思われる」と述べている。

さて、ある語がオノマトペであるか否かという問いにどう答えるかであるが、日本語教育という観点から考えると、田守・ローレンスが上にあげた 12 の要因のうち特に大切だと思われるのは e. f. g. h. i. j. k. の形態的・統語的要因ではないかと考える。というのは、ある語の音韻変化や語同士のアクセント型の違いというのは学習者にとって即座に判断できる要素とはなりにくい、その語がどんな形をしていてどう使われるのかという形態的・統語的特徴はつかみやすいのではないかと考えるからである。また実際に運用できるよう指導する際にも、統語的特徴というのはとりわけ重要になるはずである。

#### 1. 5. 2 オノマトペの「語彙化」と「境界オノマトペ」

ここで、日本語オノマトペにおける「語彙化」について考察した角岡 (2004) の論文を紹介する。また、同じく角岡 (前掲) が「境界オノマトペ」と名付けた「一見オノマトペのように思われる語」について検討する。

##### 1. 5. 2. 1 オノマトペの「語彙化」

「語彙化」というのは、1. 5. 1 項で挙げた「語彙性 (lexicality)」と意味するところは同じである。すなわち、「語彙性」の高いオノマトペは、「語彙化」の程度も高く、一般語彙に紛れていくということである。角岡は、「日本語母語話者がどの程度語源を意識しているかという尺度と関連づけるため」に、「語彙化」の枠組みを援用し、以下のように「語彙化」の程度を低いほうから順に 4 段階に区分している。

##### レベル 1 :

いわゆる流行語や特定の作家による全く新しい創作による臨時語 (nonce form) で、「多くはその場限りの用法で、一般に使用が拡大されて辞書に載るようになるまで定着する語は極めて少ない」とされる。文学作品では、宮沢賢治がその小説の中で、「星がぺかぺか光る」のような独自のオノマトペによる表現を多用していることで知られ



ている。また、流行語としては、古いところでは「ガチョーン」、最近ではテレビタレントが用い話題になった「フォー」などがこれに該当すると思われる。

#### レベル2：

多くの日本語オノマトペがこの段階に含まれ、助詞の「と」を義務的に伴う語である。語彙化の程度がより低いのはいわゆる「擬声語」と「擬音語」で、「キャーと叫んだ」「ドーンと大きな爆発音がした」「ガタンとって止まった」など、必ず引用で用いられる形である。このレベルのオノマトペは、助詞「と」を伴わないと非文になってしまう。

#### レベル3：

副詞として用いられる際に、助詞「と」の付随が任意であるもの（例：ぐるぐる（と）回る）、助詞「に」を義務的に伴うもの（例：がりがりにやせている）、助詞「と」を伴わないもの（例：病気がすっかり治る）などがこのレベルの語である。「病気がすっかり治る」の文では、「すっかり」に「と」をつけると非文になるということから、語彙化の程度がほかの語より高いと言えらる。このほかに、「する」が後続して動詞として用いられるもの（例：はっきりする）、「だ」「～になる」などが後続して形容動詞的に用いられるもの（例：ばらばらだ、ぴかぴかになる）などがある。

#### レベル4：

オノマトペ語彙に基づく各種の派生語である。動詞として用いられるものとして「～する」が後続する「がっかりする」「びっくりする」など、オノマトペ語彙の中でも、金田一（1978）のいう「擬情語」にあたるオノマトペがこれにあてはまる。<sup>27</sup>「～する」以外に、「～つく」「～めく」「～ける」「～る」などが接続した動詞（例：べとつく、ゆらめく、いじける、ねばる）があるが、この場合、語源となるオノマトペは2モーラの

---

<sup>27</sup> ここで、「～する」を伴って動詞として用いられるオノマトペが、レベル3と4の両方に分類されている。角岡はその違いについて特に言及していないが、レベル3の語は、副詞として「する」以外の動詞も修飾することができる（例：「はっきり分かる」）が、レベル4の語は、もっぱら「スル動詞」として用いられる（「がっくり肩を落とす」とは言うが「\*がっかり肩を落とす」とは言わない。また「\*びっくり飛び上がった」などということもできない）という点が異なると思われる。

語基で反復形のものに限られる。<sup>28</sup> そして、これらの動詞の場合、容易に元の語形に辿りつくことができる（例：べとべと、ゆらゆら、いじいじ、ねばねば）。

さらに、角岡の考察によれば、古い時期に形成された「おどろく」「すする」「とどろく」のような語もオノマトペを語源とするのだが、現代の母語話者はそれらの語をオノマトペと意識することはない。第一の理由は、音形的にも他のオノマトペ語彙とパターンが大きく異なり、いわゆる「オノマトペ標識」としての「反復形」「り」「ん」「っ」がついていないからである。次に、これらの語の統語範疇からも、他のオノマトペ語彙との隔たりが見られることがある。「オノマトペ語彙は現代において典型的には副詞あるいは形容動詞として用いられる」ため、動詞としての用法しか持たない語は、オノマトペと感じられないのである。第三に、上に挙げたような語は、「驚く」「啜る」「轟く」のように漢字で書かれるものも多いということがあげられる。

#### 1. 5. 2. 2 「境界オノマトペ」とは

「境界オノマトペ」というのは、「音形がオノマトペ語彙のパターンと同一であるか、または近似していることによって、一見オノマトペのように思われる語」（角岡，2004）である。角岡はさらに、そのうち漢語を起源とするものを「擬似オノマトペ」、また漢語を起源とするものの、かなで表記されることが多いため漢語という語源が辿りにくくなっているものを「かな擬似オノマトペ」と名付けている。また、形容詞や形容動詞の語幹を反復しているような場合も、「反復」がオノマトペ標識であるため、語感としてオノマトペと感じられるような語も「境界オノマトペ」であると言っている。「ほのぼの」「はるばる」などがその類である。

また、母語話者がある語に対して、それをオノマトペであると感じる「オノマトペ的語感」について次のように述べている。

1. オノマトペ標識としての「反復」<sup>29</sup>「り」「促音」「撥音」「母音の長音化」がある場合
2. モーラ数が3モーラまたは4モーラのもの

<sup>28</sup> オノマトペの語基とその派生形については、1. 3節を参照。

<sup>29</sup> ここで、名詞や動詞は語源を辿ることのできる場合が多いので、反復が起きてもオノマトペ的語感はいささか小さいとしている。（例：人々、食べに食べた）

### 3. 反復形であっても、連濁しないもの<sup>30</sup>

つまり、上記のような条件を持つ語に対しては、たとえそれが一般語であっても、母語話者はそれをオノマトペと感じる可能性があるということである。例えば、副詞の「きつと」「やつと」「だんだん」など<sup>31</sup>が、その類である。

ここで、角岡（2004）が「境界オノマトペ」、すなわち「オノマトペのように思われるが語源を調べるとそうではない」語の例として挙げた48語の中から、本論文におけるオノマトペの認定にかかわる語、すなわち日本語教育において取り扱われる可能性のあると思われるのは以下の15語<sup>32</sup>である。

あべこべ	でたらめ	からっぽ	くどくど	まんざら
みすみす	にこにこ	のびのび	のろのろ	おどおど
おろおろ	つくづく	うやむや	わざわざ	やたら(に・と)

この15語のうち、「くどくど」「にこにこ」「のびのび」「のろのろ」「おどおど」「おろおろ」は、オノマトペとしてもいいのではないかと筆者は考える。中でも「にこにこ」「のろのろ」は日本語教育の初級から中級にかけて導入され、特に「にこにこ」は意味としてもプラスのイメージを与えるためか、積極的に取り入れられているように思う。角岡が言うように、語源を辿ってそれが漢語である場合、または和語であっても動詞か形容詞である語はオノマトペとしない、というのも一つの考え方としてあると思う。しかしそのように考えると、例えば「のびのび」が「のびる」から出来た語であり、また「のんびり」とも意味的関連性を持つという、オノマトペ語彙の「音象徴性」と「体系性」という最大の特徴をわざわざ曇らせてしまう結果になるのではないだろうか。そうではなく、日本語教育という立場からすれば、むしろオノマトペ語彙の持つ特徴を積極的に学習や指導に役立てるべきではないかと考える。

---

<sup>30</sup> オノマトペ語彙においては、原則として連濁は起こらないことは、1. 3. 2項でも触れた。

<sup>31</sup> これらの語については、1. 5. 3項で詳しく検討する。

<sup>32</sup> ここで検討する語の範囲は、日本語教育関係の語彙データベースとしては最大の『1万語語彙分類集』に取り上げられている10,000語の中とした。

### 1. 5. 3 先行研究と辞書におけるオノマトペの認定

【表5】は、玉村(1989)ほか主要な先行研究<sup>33</sup>においてオノマトペとされた語(表中の6語)が、既存の擬音語・擬態語辞典<sup>34</sup>に見出し語として採用されているかどうかを調査した結果である。(○はオノマトペとして記述あり。×は記述なし。△は特定の意味に限定する等の条件付きで記述あり。)

【表5】 先行研究および辞書の見出し語におけるオノマトペの認定

玉村(1989) ほか	浅野 (1978)	Kakehi ほか (1996)	飛田・浅田 (2002)	山口 (2003)
きっと	△	△	△	△
ずっと	×	○	△	○
だんだん	×	×	△	×
ちょっと	×	×	△	×
もっと	×	×	×	×
やっと	×	×	×	×

「きっと」は、4種すべての辞書において見出し語として採用されているが、「きっと口を結ぶ」(ここでの「きっと」は頭高アクセントで発音される)の用法でのみ解説があり、いわゆる「必ず」という意味では擬態語として認めていないことがわかる。また、山口(2003)の辞典には、「なお、「明日きっと行く」のような場合の「必ず」という意味に使われる「きっと」は擬態語ではない」という解説がついている。「もっと」と「やっと」については、いずれの辞書にも記載はない。

「ずっと」は、Kakehi ほか(1996)と山口(2003)、飛田・浅田(2002)の辞書で見出し語として採用されている。この3点の辞書における「ずっと」の扱いを見てみよう。以下に、それぞれの辞書に載せられている意味記述と用例を挙げる。(用例中の下線は筆者)

<sup>33</sup> 玉村文郎(1989)、加藤扶久美(1999)、渡邊裕子(1997)の論文については、第4章1節で改めて紹介する。

<sup>34</sup> これらの辞書の詳細については、第2章1節を参照のこと。

(1) Kakehi ほか (1996) の辞書における意味記述と用例<sup>35</sup>

M1 : [継続または進行のAspectを表す副詞] ある動作がかなりの時間続く様子、  
またその動作が継続している状態

用例 : 「雪は一週間もずっと降り続き、野も山も一面の銀世界だ」

M2 : 量や程度がより大きい又は小さいことを示す

用例 : 「人気のあった映画では、(中略) 大抵の場合はパート1の方がずっと面白い」

(2) 山口 (2003) の辞書における意味記述と用例

①ある状態が長く続く様子。また、一列に並ぶ様子。時間的な長さや距離の長さをさ  
す。

用例 : 「一度試すとずっとひたっていたくなるホカホカ暖房」

「両側に桜並木のずっとならんだ紅葉坂は」

②近寄る様子やにじり寄る様子。

用例 : 「まあ、こっちへずっと寄ってお酌をしてください」

③勢いよく、物ごとをすすめていく様子。

用例 : 「…と云いながらズツと番頭を引立てに掛るから」

◆ 類義語 「ずーっ」

「ずーっ」は①の類義語。「ずっ」は単に時間や空間の隔たりを表すのに対し、「ず  
ーっ」は表現する人の感覚が実際より長く感じる時に使う。

用例 : 「ながぐつをずーっとひきずると」

Kakehi ほか (1996) では、「ずっと」の意味を<動作・状態の継続>と<程度の比較>  
と捉えている。山口 (2003) では、<動作・状態の継続>に加えて<列状に並ぶ様子>を  
挙げ、さらに<にじり寄る様子>と<動作の勢いの良さ>の3つの意味に捉えている。2  
つの辞典に共通して取り上げられているのは、いわゆる時間的または空間的<継続>のA  
spectをを表す用法である。では、飛田・浅田 (2002) ではどう記述されているだろうか。

(3) 飛田・浅田 (2002) の辞書における意味記述と用例<sup>36</sup>

<sup>35</sup> 原典は英語であるため、ここでは筆者訳を載せる。例文も一部省略している。また、こ  
の辞書において、Mは「擬態」の意味を表す記号であり、Sが「擬音」である。

(1)① 椅子を後ろにずっと引いて立ち上がった。

重い物を一回引きずるときに出る音を表す。ややマイナスイメージの語。実際の音を描写するよう用法で用いる。「ずっずっ」は反復・連続形。重量感と不快の暗示がある。

飛田・浅田（2002）では、この①の意味のほかにも以下のように3つの意味項目を立てて用例が挙げられている。

(2) 今度の映画のほうがずっと出来がよい。

(3) 三日前からずっと雨が降り続けている。

(4) こっちへずっとお入んなさい。

そして、この(2)(3)(4)については意味の解説はされておらず、『現代副詞用法辞典』<sup>37</sup>「ずっと」「ずうっと」を参照としている。飛田・浅田は、『現代副詞用法辞典』を編纂するにあたり、擬音語・擬態語は除くという方針をとっている。つまり、「ずっと」が<程度の比較><状態の継続><動作の勢いの良さ>の意味で用いられるときは、一般の「副詞」という認定をしているわけである。また、飛田・浅田（2002）では、「きっと」についても、「必ず」という意味での用例は載せているものの、解説は同様に『現代副詞用法辞典』を参照としている。

次に、「だんだん」と「ちょっと」であるが、見出し語として採用したのは、飛田・浅田（2002）の辞書のみである。「だんだん」は、「遠くでダンダンと銃声が出た」という用例が載せられていて、「父の病状はだんだんよくなっている」の用例における意味は、継続の意味の「ずっと」と同様に、『現代副詞用法辞典』を参照という扱いになっている。また、「ちょっと」は、「ちよっ、あんないたずらしなきゃよかったな」という舌打ちの音を表す用法が挙げられていて、「チーズケーキをちょっとだけ食べたいな」「ちょっと待ってね」等の用例については、やはり『現代副詞用法辞典』を参照という扱いになっている。

また、**Kakehi** ほか(1996)の辞書では、「ちょっと」を見出し語として載せた上で、「元々

---

<sup>36</sup> この辞書では、まず用例があり、それから意味の解説がされている。それぞれの用例は複数挙げられているが、ここでは一つしか載せていない。

<sup>37</sup> 飛田・浅田（1994）

オノマトペであったと考えられるが」という注をつけ、結局オノマトペではないと断定している。しかし、たしかに「ちょっと」は他の語に比べオノマトペとしての要素を強く持っているものと思われる。それは、第1章3節でも考察したように、「ちょっと」にはオノマトペ語基としての「ちょ」が認められる。そして「ちょいちょい」「ちょつきり」「ちょっくら」「ちょこっと」「ちょびちょび」「ちょぼちょぼ」「ちょろちょろ」「ちょろっと」等、わずかな量や程度という意味を持つ「ちょ」を語基として多くの派生形を持つことからわかる。実際、「ちょっと」以外の上に挙げたような「ちょ」を語基に持つ語は、他の擬音語・擬態語辞典にもオノマトペとして取り上げられているものも多い。したがって、「ちょっと」もオノマトペであると認定することも可能であると思われるが、本論文では、**Kakehi** ほか (1996) と飛田・浅田 (2002) の扱い方に従って、「ちょっと」は一般の副詞であると考え。上記の4冊以外にも擬音語・擬態語辞典や教材を調べてみたが、「ちょっと」をオノマトペ (擬音語・擬態語) として見出し語に採用しているのは、『擬音語・擬態語の読本』1冊のみであった。このことも、「ちょっと」が一般的にオノマトペとしては考えられていないという論証になると思う。

以上の考察の結果、【表5】の6語のうち、「きっと」「ずっと」「だんだん」「ちょっと」等は、境界にある語<sup>38</sup>として判断が分かれていると考えられたが、本論文ではいずれもオノマトペではないという結論に達する。

#### 1. 5. 4 オノマトペの条件

1. 5. 4項では、これまで考察してきたことを基に、オノマトペ語彙が持つ4つの特徴を以下にもう一度簡単にまとめ、語がどのような条件の下にオノマトペと認定され得るかを考える。また、オノマトペの典型的な4つの形態に属する語は、それぞれの型によってほぼ同一のアクセント型を有すること、そしてその型によって、一般語との識別が可能であるという玉村 (1984) の指摘もあわせて紹介する。

##### 1. 5. 4. 1 オノマトペの4つの特徴

---

<sup>38</sup> 1. 6. 2で、角岡 (2004) の「境界オノマトペ」についてみたが、角岡はそもそもこれらの語を「境界」にある語として考察の対象としていない。それは、角岡が **Kakehi** ほか (1996) の辞典の見出し語を研究のデータベースとしているからである。

### (1) 音象徴性

オノマトペが他の語と弁別される大きな特徴は、その音と意味に関連性が認められるという音象徴性であろう。例えば、「す」という音を持つ語、「すいすい」「するする」「すてん」「すたすた」「するり」「すーっ」等にはくなめらか<>すべる<>スムーズ<>静けさ<>等の意味が暗示される。また、「ころころ」と「ごろごろ」、「とんとん」と「どんどん」等における清音・濁音の対比は、対象物の軽重や感じられる音の大小等に対応している。また、母音[a]が拡がりを表すのに対し、[o]は内にこもる感じを表す、また長音は動作や状態の持続性を表す等、オノマトペにおいては様々な音象徴性が認められる。言い換えれば、ある音がある事態や状態を象徴するとき、それは紛れもなくオノマトペである可能性が高いということである。

### (2) オノマトペ標識

オノマトペの第二の大きな特徴は、その音韻・形態である。1. 3節でも見た通り、日向・笹目(1998)は、擬音語・擬態語1,647語をその語形から49の類型に分類している。この分類で最も多く見られたのが「わくわく」「がたがた」等、オノマトペに典型的な「A BAB」型であり、全体の約4分の1を占める。以下、語形として多い順に、「どさっ」「にこっ」等の「ABっ」型、「ぐるり」「きらり」等の「ABり」型、「すっきり」「しっかり」等の「AっBり」型、「がちゃん」「ぼかん」等の「ABん」型と続くが、これら上位5つの語形とそれらの変種のほぼすべての語形は、その形態に「促音」・「撥音」・「り」・「母音の長音化」・「反復」のいずれかを伴う。これらは「オノマトペ標識」と呼ばれ、語がその形態からオノマトペと認識される重要な要素となる。

ただし、ここで注意しなければならないのは、上述した「オノマトペ標識」としての音韻形態を持つ語がすべてオノマトペなのかということ、そうではないということである。ここが、これまでオノマトペの範疇、すなわち他の語との境界を定めることを困難にしていることの一つの原因でもある。

なお角岡(2002)では、この5つのオノマトペ標識のほかに、「ぼい」「ぐい」等に見られる「い」も挙げているが、該当する語の数が限られるため、<sup>39</sup> 本稿ではオノマトペ標識としない。

<sup>39</sup> 角岡(2002)によれば、語基に「い」が接続するオノマトペは、「ぐい」「ぷい」「ぴょい」「ずい」「ふい」「ひょい」「ぼい」「つい」「ちよい」の9つである。



### (3) 語基と異形の存在

オノマトペは多くの場合、1音節以上からなる語基のもとに複数の異形を持つ。例えば、「が」「た」という語基を持つオノマトペは、「がたっ」「がたり」「がたん」「がたがた」「がったん」等、多くの異形（ヴァリエント）を持つ。ここで、語基とは、「共時的な意味において、様態を表現する形態素として最小の音韻単位」（角岡，2001）である。そしてそれぞれの異形は、同じ語基を持つことによって、ある共通の意義素を有していると言える。言い換えれば、一つのオノマトペ語基に、オノマトペ標識としての「促音」・「撥音」・「り」等が接続したり、また「母音の長音化」「繰り返し」が起こったりすることによって、複数のオノマトペが生産され得るということである。これは、他の語に頻繁に見られることではなく<sup>40</sup>、オノマトペが他の語から識別され得るはっきりした体系を持つ語群であることの証拠でもある。

### (4) 統語的特徴

オノマトペは様態副詞として機能することが多いが、同時に副詞以外の複数の品詞としての用法を持つものも少なくない。例えば「きらきら」は、「きらきら（と）光る」という様態副詞としての用法のほかに、「きらきらする」「きらきらした目」「きらきら星」のように、また同様に「しっかり」も、「しっかり勉強する」「しっかりする」「しっかりした子」「しっかり者」などの用法を持つ。一方、例えば「かならず」という副詞は、「かならず勉強する」という副詞用法以外には、「かならずする」<sup>41</sup>「\*かならずしたN」「\*かならずN」などという言い方はない。

オノマトペは上記以外にも、引用用法（例：「リーン、リーン」と鳴る。「キャーッ」という叫び声）、文外独立用法（例：ピンポン！玄関のチャイムが鳴った）、漫画などのラベルとしての用法（例：「ドキッ！」「ガガーン」）、広告や新聞の見出しなどに見られる叙述要素の省略用法（例：「足元ぽかぽか」「金メダルを手になっこり」）など、様々な用法を持つ。<sup>42</sup>これらのうち、引用用法、文外独立用法、漫画のラベルとしての用法は、オノマトペが語彙化されておらずパラ言語的に用いられていることを示唆するものであり、特に

<sup>40</sup> もちろん他の語においても、いわゆる強調形としての「促音」の挿入、「繰り返し」「母音の長音化」等は見られるが、数量的にも限られている。

<sup>41</sup> ここでいう「かならずする」はもちろん、「勉強をかならずする」という用法とは違う。

<sup>42</sup> これらの用法の詳細については、1. 4. 1. 6～1. 4. 1. 8を参照のこと。

臨時的な擬音オノマトペに特徴的な用法であると言える。また、叙述要素を省略することは一般語においても見られるが、一般語の場合には、省略され得るのは「する」と「だ」という叙述要素に限られる（例：「バランスを崩して転倒」「今日から5連休」）。しかし、オノマトペにおいては「する」、「だ」以外に一般の動詞も省略することができるという特徴がある。（例：関東地方ぐらり（と揺れる）。ステーキ2枚をぺろり（と食べた））

#### 1. 5. 4. 2 オノマトペにおけるアクセント型

玉村（1984）は、音象徴語の認定基準の私案として、(1)音素分布、(2)連濁忌避、(3)アクセント型の3つをあげているが、このうちの(3)アクセント型について、以下にその考察を引用しながらまとめる。<sup>43</sup>

和語の音象徴語には、以下のように、2拍語基の畳語化形のような集中率の高い代表的な型がある。

ア	2拍畳語（スヤスヤ　ペロペロ　ポキポキ）	42.86% <sup>44</sup>
イ	促音挿入+「リ」（シットリ　ベッタリ　パッチリ）	12.77%
ウ	語基+「リ」（コロリ　グラリ　パクリ）	12.01%
エ	撥音挿入+「リ」（マンジリ　コンガリ　ゲンナリ）	2.15%

そして、このような代表型に属する語は、大体において、それぞれ以下に示すように同一のアクセントを有している。（以下で、X、Yなどは拍を表すものとする。）

- ア X<sup>1</sup>YXY
- イ X<sup>1</sup>YY<sup>1</sup>リ
- ウ XY<sup>1</sup>リ または X<sup>1</sup>Yリ
- エ X<sup>1</sup>NY<sup>1</sup>リ

一方、同一語形の無契語<sup>45</sup>のアクセントは、以下のようになる。

<sup>43</sup> 内容は原典通りであるが、例として挙げた語は一部省略している。また、表記も若干変えているところがある。

<sup>44</sup> 玉村が、『分類語彙表』収載の音象徴語を型ごとに分類し、その異なり語数の百分比を出したものである。

<sup>45</sup> 玉村は、音象徴語を有契語、すなわち<能記と所記の関係が有契的である語>と定義し、それ以外の一般語を無契語と呼んでいる。

ア' イエ<sup>1</sup>イエ ヒト<sup>1</sup>ビト シミ<sup>1</sup>ジミ  
 ヒエ<sup>1</sup>ビエ ヤマ<sup>1</sup>ヤマ (ヤマ<sup>1</sup>ヤマ)  
 ム<sup>1</sup>ラムラ クニ<sup>1</sup>グニ  
 イ' ヒッ<sup>1</sup>パリ ツッ<sup>1</sup>パリ ハッ<sup>1</sup>トリ  
 ヨッタ<sup>1</sup>リが行く (ヨッタ<sup>1</sup>リ行く) デッ<sup>1</sup>チリ  
 ウ' クス<sup>1</sup>リ スズ<sup>1</sup>リ オツ<sup>1</sup>リ マツ<sup>1</sup>リ (マツ<sup>1</sup>リ)  
 エ' イン<sup>1</sup>テリ オン<sup>1</sup>ドリ クン<sup>1</sup>ダリ フン<sup>1</sup>ギリ モン<sup>1</sup>ドリ ジン<sup>1</sup>トリ (ジン<sup>1</sup>トリ)

このように、一つには音象徴語のア・イ・ウ・エの各型のアクセントと一致しないこと、二つには同一語形群の個々の語がさまざまなアクセント型に分かれてとりどりであることの2点において、音象徴語のアクセントとは明確に異なっている。そこで玉村は、「無契語のシミルから分出したと考えられるシミジミは、シミジミであって、ア型ではないが、同じくイソグから分出したと考えられるイソイソやウネ(ル) から分出したと考えられるウネウネなどはア型になっているので、あとの2語は音象徴語になっていると考えられる。」とし、アクセント型による音象徴語と無契語との識別は、かなり有効な基準ではないかと結論づけている。

#### 1. 5. 5 本論文におけるオノマトペの定義

以上、1. 5. 4項で、オノマトペを他の語と弁別し得るいくつかの条件を考えたが、オノマトペには上述したような条件のすべてを備えた典型的なものから、一般の副詞との境界にあるような周縁的なものまで、その「オノマトペ度」あるいは「語彙化」の程度は様々であると言える。

畠 (1991, p. 19) は、オノマトペのこのような点について、普通、情態副詞に分類されている擬声語擬態語は、「豊かな表現力で発話を新鮮に創造的にするのに有効な手段で、非常にルールが柔らかく、変化や変種に寛容である」とし、「猫」を勝手に「ヌコ」と言うことは許されないが、「小枝をピシピシと折った」という代わりに、「ペキペキ」「バコバコ」と言っても、耳慣れないだけで、むしろその表現の独自性、個別性が評価される場合もある、という例を挙げている。そして、「このような特殊な性質を持ちつつ、狭義の擬声擬態語からより一般的な意味を獲得しながら、修飾語を受けるなど、次第に一般の副詞として

の性質を備えるようになった語」の例として、「はっきり」「のんびり」などを挙げている。また、「ぴったり」のように、始めは情態副詞としての用法（例：ぴったり(と)合う）だけだったのが、「ぴったりの服」「ぴったりだ」のように、様々な文法的な形で使われるようになった語もある、と言っている。畠が、「擬声語擬態語は、副詞、形容動詞とよばれる品詞間の連続性や変容の過程を考える上で示唆的である」と言っている通り、オノマトペは、音象徴語として音韻・形態的に、また意味的にも非常に体系化された語群である一方で、統語的には、とても一つに括ることができない変化に富む語群であると言える。

さて、序章でも述べた通り、本論文の趣旨は、日本語教育におけるオノマトペ学習・指導のために、基本的なオノマトペを選定しリソース化することにある。そのためには、日本語において典型的なオノマトペのみを取り上げることも、また反対に、一般の副詞に近いとされる周辺的なものに限定して取り上げることも、その趣意には沿わない。むしろ、典型的なものはもちろんのこと、オノマトペの要素を持つと考えられる周辺的なものも積極的に取り込むことで、オノマトペという特徴的な語群を意識化させ、学習や指導の対象として認識させたいと考える。それは、例えば「はっきり」「きちんと」など従来一般の副詞として扱われてきた語も、「はき」「きち」という語基をもとに、「はきはき」「きちきち」「きっちり」など、意義素を共有する異形を持つからである。また「びっくりする」「いらいらする」など、「する」を伴って動詞として用いられる語の中にも、オノマトペとしての音象徴性と形態的特徴を持っているものがある。これらの語をオノマトペとして、その体系性や特徴に着目させて指導していくことで、中級後半から上級の語彙学習がより効率的になるのではないかと考える。

よって、本論文においては、これまで一般の副詞として認識され、オノマトペとしては周辺的であると考えられるようないくつかの語についても、上にあげたオノマトペの特徴のうち、少なくとも2つ以上の特徴を持つものはオノマトペであると定義する。それらは、例えば以下のような語である。

あっさり	きちんと	さっぱり	しっかり	じっと
そろそろ	ちゃんと	のんびり	はっきり	ゆっくり

これらの語とそれに類する語も、オノマトペであるという認識のもとに、第2章以降の様々な調査および考察、そして日本語教育におけるオノマトペ教育のあり方、さらに「基本オノマトペ」の選定とそのリソース化に向けて論を進めることとする。